

シーボルトの生涯とその業績関係年表Ⅲ (1856年-1862年)

石 山 禎 一
宮 崎 克 則

凡 例

- 【1】 *印は主としてシーボルトに関わる人々が出した書簡類などを示す。
○印はシーボルトに関わる事項、または彼が記述した内容および直接相手方に宛てた手紙などを示す。
△印はシーボルトの門人関係などを示す。
◇印は当時の内外の政治・外交・文化などの事項を示す。
なお、人名などの不明箇所には〔?〕を付している。
- 【2】 年表中に見られる書簡類は、主としてフォン・ブランデンシュタイン家（シーボルトの末裔、ドイツのヘッセン州シュルヒテルン市郊外在住）所蔵文書をもとに石山の責任で系統的に整理し、年代順に並べ替えて記載した。これら書簡類には、シーボルトの幅広い人的交流・活動範囲などが十分窺い知ることができるので、すべて掲載することにした。なお、所蔵文書中で年月日が不明なもの、あるいは未記入のもの、また宛先不明の書簡類などは、本年表には記載できないため除いた。

【参考文献】

関係年表は、主に以下の文献を参照して作成した。

- (1) 呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』吐鳳堂書店 1925年。
- (2) 日独文化協会編『シーボルト関係書翰集』郁文堂書店 1941年。
- (3) 『上野図書館紀要』第2冊 国立国会図書館支部 上野図書館 1955年。
- (4) 『図説 国民の歴史』1・2 日本近代史研究会 1965年。
- (5) L. B. Holthuis・酒井恒『シーボルトと日本動物誌』学術書出版会 1970年。
- (6) 『参考書誌研究』11号 国立国会図書館参考書誌部 1975年。

- (7) 『シーボルト「フロラヤポニカ」』（解説）講談社 1976年。
- (8) 『江崎梯三著作集』第1巻 思索社 1984年。
- (9) 『F.ベアト幕末日本写真集』横浜開港資料館 1987年。
- (10) 横田洋一編『横浜浮世絵』有隣堂 1989年。
- (11) 『鳴滝紀要』1～20号 シーボルト記念館 1991～2010年。
- (12) 金井圓『近世日本とオランダ』財団法人放送大学教育振興会 1993年。
- (13) 『シーボルト「日本」』本文・図録 全9巻 雄松堂書店 1997年。
- (14) 箭内健次・宮崎道生編『シーボルトと日本の開国・近代化』続群書類従完成会 1997年。
- (15) フォン・ブランデンシュタイン家所蔵『シーボルト関係文書マイクロフィルム目録』1・2巻 2001年 長崎市教育委員会・シーボルト記念館。
- (16) 『新・シーボルト研究』I・II 八坂書房 2003年。
- (17) 開国150周年記念資料集『江戸の外国公使館』港区郷土資料館 2005年。
- (18) 『異国人の見た幕末明治 JAPAN』新人物往来社 2005年。
- (19) 石山禎一・牧幸一訳『シーボルト日記』八坂書房 2006年。
- (20) 宮崎克則「復元：シーボルト『NIPPON』の配本」（『九州大学総合研究博物館研究報告』3号 2005年），同「シーボルト『NIPPON』の色つき図版」（『九州大学総合研究博物館研究報告』5号 2007年），同「シーボルト『NIPPON』のフランス語版」（『九州大学総合研究博物館研究報告』6号 2008年），同「シーボルト『NIPPON』のロシア語版」（『九州大学総合研究博物館研究報告』8号 2010年）。
- (21) 栗原福也編訳『シーボルトの日本報告』東洋文庫784 平凡社 2009年。
- (22) Dr. Hans Körner: Die Würzburger Siebold. Eine Gelehrtenfamilie des 18. und 19. Jahrhunderts. Leipzig Johann Ambrosius Barth Verlag. 1967. S., 356-557. (Lebensdarstellungen deutscher Naturforscher, hrsg. von der Deutschen Akademie der Naturforscher Leopoldina durch Rudolph Zaunick. Nr.13). : 竹内精一訳『シーボルト父子伝』創造社 1974年。
- (23) ACTA SIEBOLDIANA III. Die Sieboldiana-Sammlung der Ruhr-Universität Bochum, Beschrieben von Vera Schmidt., 1989. OTTO HARRASSOWITZ · WIESBADEN.
- (24) Philipp Franz von Siebold. : Schreib-Kalender für das Schaltjahr 1852.
- (25) Philipp Franz von Siebold. : Geschäfts-und Termin-Kalender für das Schltjahr 1856.
- (26) Philipp Franz von Siebold. : Nederlandsche en Japansche Almanak voor het Jaar 1861.
- (27) Liefer-und Abrechnungsbuch über Nippon und andere große Veröffentlichungen Siebolds für die Jahre 1833-1838.
- (28) Liefer-und Abrechnungsbuch über Nippon und andere große Veröffentlichungen Siebolds für die Jahre 1832-1840.
- (29) Liefer-und Abrechnungsbuch über Bücher und Immobilien für die Jahre 1836-1843, mit

einem Voewort.

- (30) Liefer-und Abrechnungsbuch für die Jahre 1839-1847.
- (31) Philipp Franz von Siebold. : Tägliches Erinnerungs-Buch für alle Stände. 1848-1850.
- (32) Verzeichnis der Subskribenten und Lieferungen zu Nippon, mit einer Zusammenstellung und Pro Memoria durch Alexander von Siebold.
- (33) Philipp Franz von Siebold. : Bücherversendungen nach Russland 1853.
- (34) Aufstellungen etc. letr Subskription auf Werk. Philipp Franz von Siebold's Nippon, Fauna, Flora u.s.w. 1834-1848.
- (35) PHILIPP FRANZ VON SIEBOLD, A Contribution to the Study the Historical Relation betwe-en Japan and the Netherlands. The Netherlands Association for Japanese Studies, c/o Center for Japanese Studies, Leiden University 1978. (Philipp Franz von Siebold and the Opening of Ja-pan, 1843-1866) (注：マックリオン論文は、横山伊徳『幕末維新論集7 幕末維新と外交』吉川弘文館 2001年)。

* (22)~(33)の原本は、ドイツのポフム大学図書館に所蔵されている。

3. ヨーロッパでの日本研究と活動

1856年（安政3年） 60歳

- * 1月3日（11・26）プロシア国侍従官 G.ブックラーがコブレンツからシーボルト宛に書簡を送る。
- 1月5日（11・28）ケルンにて、「1856年1月5日付ケルン新聞記事抜粋」をメモする。
- * 同日、アルベルティーネ・ノルテがゲッチンゲンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月6日（11・29）園芸家ルイーゼ・ストリイボッシュがボッシュからシーボルト宛に書簡を送る。
- 1月8日（12・1）オランダ植民大臣ピーター・メイヤー（Pieter Meijer）宛の手紙と報告書を書く。
- * 1月11日（12・4）ブルーウメがボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月21日（12・14）アルベルティーネ・ノルテがゲッチンゲンからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇ 1月30日（12・23）日蘭和親条約締結。
- * 2月4日（12・28）オランダ王子ヘンドリックがハーグからシーボルト宛に書簡を

送る。アルベルティーネ・ノルテがゲッティンゲンからシーボルト宛に書簡を送る。

- * 2月5日 (12・29) オランダ王子ヘンドリックがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月8日 (1・3) ライデン大学植物学教授 W.H.デ・フリーゼがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月11日 (1・6) ヴェイゲル (T. O. Weigel) 書店がライプツィヒからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月12日 (1・7) ロッテルダム船主・貿易商 A.ファン・ホボークン (A. van Hoboken & Zonen) 親子商会在がロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。



〔図64〕現在のロッテルダム港

- * 同日, アルベルティーネ・ノルテがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月16日 (1・11) メイヤー博士・教授 (Prof. Dr. Meyer) がケーニッヒベルグ (Königberg) からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月24日 (1・19) アルベルティーネ・ノルテがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月26日 (1・21) キノウ博士がシーボルト宛に書簡を送る。
- 2月27日 (1・22) ボンにて, アレクサンダー・フォン・シーボルト (Alexander von Siebold) 宛の手紙を書く。
- 2月29日 (1・24) ボンにて, オランダ国王 (ウィレム3世) 宛の手紙を書く。
- * 同日, キノウ博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。

- * 3月14日（2・8）ライデン大学植物学教授 W.H.デ・フリーゼがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- 3月23日（2・17）ボンにて、アレクサンダー・フォン・シーボルト宛の手紙を書く。
- * 同日、王立レオポルディーナ自然科学アカデミー総裁ネース・フォン・エーゼンベック博士がベルリンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月31日（2・25）オランダ植民大臣（P.メイヤー）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 4月1日（2・26）アルベルティーネ・ノルテがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 4月8日（3・4）オランダ王子ヘンドリックがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月15日（3・11）ボンにて、東部シベリア提督ムラヴィエフ（Murawieff）宛の手紙を書く。
- * 4月19日（3・15）Fr.シャウムブルグ書店がウィーンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 4月21日（3・17）オランダの書籍・文房具商がシーボルト宛に請求書を送る。
- * 同日、ベルモント博士（Dr. belmont）がパラマリボ（Paramaribo）からシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月日付不詳、ボンにて、東部シベリア提督ムラヴィエフ宛の手紙を書く。
- * 5月4日（4・1）アルベルティーネ・ノルテがパラマリボからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月14日（4・11）エイゼン商会（Firma. F.C. Eisen）がケルンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月20日（4・17）Fr.フライシャー書店がライプツイッヒから請求書を送る。
- * 5月22日（4・19）ライデン大学植物学教授 W.H.デ・フリーゼがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月27日（4・24）ライデン大学植物学教授 W.H.デ・フリーゼがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月29日（4・26）テルシェル？（Terschel）がボンからシーボルト宛に書簡を送る。

- * 6月3日 (5・1) アルベルティーネ・ノルテがロツテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 6月5日 (5・3) ザーレンロート (C. Sahrenroth) がセント・ゴアール (St. Goar) からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 6月11日 (5・9) アルベルティーネ・ノルテがロツテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 6月13日 (5・11) ザーレンロートがセント・ゴアールからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 6月20日 (5・18) シュルツ (W. Schultz) がケルンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 6月22日 (5・20) ニコライ (Nikolaii) 男爵がベルリンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 6月30日 (5・28) アルベルティーネ・ノルテがロツテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。W.シュルツがケルンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 7月10日 (6・9) G.フォン・エストルフがシュロート・ヤーゲルブルグ (Schloth Jagerburg) からシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月15日 (6・14) 広告『フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト旧蔵の高価な古代ロココ，中国，日本の家具・彫刻・陶磁器・武器および大部分オランダの古い絵画リスト』(印刷物)
- * 7月16日 (6・15) プットカマー? (Puttkamer) がバーデン (Baden) からシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月21日 (6・20) フランクフルトからクリフトフ・ベルシュネアー (Christoph Belschner) 宛に領収書 (金額1,500グルデン)。
- * 同日，アルベルティーネ・ノルテがロツテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 7月25日 (6・24) オランダ王子侍従J.ラグートがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 7月28日 (6・27) ギーセンのステロ版活字印刷会社 (Giesserei Schrift-und Sterotype) がフランクフルト・アム・マイン (Frankfurt am Main) からシーボルト宛に活字製作に関する請求書を送る。
- * 同日，ナタリー・フォン・シーボルト (Nathalie von Siebold シーボルト家の一族?)

がダルムシュタット（Darmstadt）からシーボルト宛に書簡を送る。

- * 8月4日（7・4）ライデンの王立自然史博物館管理官・動物学者シュレーゲル（H. Schlegel）がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 8月6日（7・6）C.ザーレンロートがシーボルト宛に書簡を送る。
- * 8月9日（7・9）プランデル・メイヤー（Prandel Meyer）がウィーンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 8月12日（7・12）ナタリー・フォン・シーボルト（シーボルト家の一族？）がダルムシュタットからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 8月22日（7・22）ヒルシュバルド（Hirschwald）書店がベルリンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日、ライデン大学植物学教授 W.H. デ・フリーゼがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 8月23日（7・23）C.ザーレンロートがシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日、ツァイツ（C. Zeitz）がニーダーバイシェムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 8月30日（8・1）オランダ植民大臣（P.メイヤー）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月1日（8・3）マーテンプロード？（Martenbrod）がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日、オランダの海軍士官カッテンディーケ（R. H. Kattendijke）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月3日（8・5）オランダ王子侍従 J.ラグートがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月6日（8・8）H.ナロップ／C.ツァイツがシーボルト宛に賃貸対照表を送る。
- * 9月8日（8・10）マルテンプロード？がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月9日（8・11）オランダ王子ヘンドリックがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日、アルベルティーネ・ノルテがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月11日（8・13）オランダ植民大臣事務次官がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

- * 同日, H.ナロップがニーダーバイシェイムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月15日(8・17) ロッテルダムの船主・貿易商 A.ホボーケンがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- 9月18日(8・20) ライデンにて, オランダ植民大臣(P.メイヤー)宛の手紙と報告書を書く。
- * 9月19日(8・21) オランダ植民大臣事務次官がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月21日(8・23) ライデン大学植物学教授 W.H.デ・フリーゼがライデンからシーボルト宛書簡を送る。
- * 9月24日(8・26) オランダ植民大臣(P.メイヤー)がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月26日(8・28) オランダ植民大臣事務次官がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月29日(9・1) オランダの海軍士官 R.H.ファン・カッテンディーケがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月1日(9・3) 時計職人・雑貨商ファン・アーケン(C. van Arcken)がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, メーレン(F. A. Mehlen)がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, ファン・エルンスト・ダイク(J. van Ernst Dyk)がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月3日(9・5) デリモン?(W. Delimon)がボンからシーボルト宛に請求書を送る。
- * 10月7日(9・9) アルフェン(Alphen)がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, アルンツ社(Arnz & Comp)がデュセルドルフからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月12日(9・14) オランダの海軍士官 R.H.ファン・カッテンディーケがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, ヨーゼフ・ケラー教授(Prof. Joseph Keller)がデュッセルドルフからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月13日(9・15) オランダ植民大臣(P.メイヤー)がハーグからシーボルト宛に

書簡を送る。

- *10月16日（9・18）キールドルフ（J. M. Kierdorff）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *10月19日（9・21）ハーケン・プロムドゥル（Haaken-Plomdeur）がリエージュ（Liège）からシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、ライデン大学植物学教授 W.H.デ・フリーゼがシーボルト宛に書簡を送る。
- 10月23日（9・25）ライデンにて、ロシア帝立種苗園所長フランツ・クーン宛に兩替証を送る。
- *同日、オランダ植民大臣（P.メイヤー）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *10月27日（9・29）オランダ植民大臣（P.メイヤー）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *10月29日（10・1）メイ（J. May）がヴウルフェルディングン（Wulferdingen）からシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、デ・ステイグリッツ商会（de Stieglitz & Co.）がサンクト・ペテルブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月3日（10・6）オランダ植民大臣（P.メイヤー）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、在日オランダ全権特使・商館長ドンケル・クルチウスが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月5日（10・8）オランダ植民大臣（P.メイヤー）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月6日（10・9）オランダ植民大臣（P.メイヤー）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月7日（10・10）アルベルティーネ・ノルテがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月8日（10・11）ロッテルダムの運送業者デ・コック（de Cock）がロッテルダムからシーボルト宛に請求書を送る。
- *同日、マーテンブロード（S. Martenbrod）がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月10日（10・13）オランダ植民大臣（P.メイヤー）がハーグからシーボルト宛に

書簡を送る。

- *同日、時計職人・雑貨商ファン・アーケン (C. van Arcken) がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月11日 (10・14) オランダ植民大臣 (P.メイヤー) がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月12日 (10・15) ガラス実験器具製作者スペイヤー (J. Speyer) がアムステルダムからシーボルト宛に請求書を送る。
- *同日、ローマン (J. C. Loman) がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月13日 (10・16) オランダの書籍・文房具商がシーボルト宛に請求書を送る。
- *11月14日 (10・17) エンシェデ親子商会 (Enschede en Zonen) がハーレムからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月15日 (10・18) ローマン (J. C. Loman) がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月17日 (10・20) ファン・エムデン (van Emden) がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月18日 (10・21) クリスタルガラス製陶器製作者ペトルス・レゴウト (Petrus Regout) がマーストリヒト (Maastricht) からシーボルト宛に請求書を送る。
- *同日、キナウ博士がボンからシーボルト宛に招待状を送る。
- *同日、グーデンダハ (J. Gudendag) がアムステルダムからシーボルト宛に書簡と請求書を送る。
- *11月19日 (10・22) アルバート・マッツ (Albert Matz) 出版社がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、ファン・ストックム? (M. F. van Stochum) がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月21日 (10・24) エンシェデ親子商会がハーレムからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月24日 (10・27) オランダ植民大臣 (P.メイヤー) がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月27日 (10・30) ライデンからアムステルダムのデ・ムニク? (G. J. de Munick) 宛の手紙を書く。
- *同日、J.グーデンダハがアムステルダムからシーボルト宛の書簡と請求書を送る。

- * 同日, J.エンシェデがハーレムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 11月28日（11・1）デルゲン？（P. H. Delgen）がロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, ロッテルダムの運送業者デ・コックがロッテルダムからシーボルト宛に請求書を送る。
- * 同日, レムベルス（A. Lempers）がライデンからシーボルト宛に請求書を送る。
- * 同日, J.スペイヤーがアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, オランダ植民地省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 11月30日（11・3）J.スペイヤーがアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, J.M.メーウスがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 11月日付不詳, 文房具商ゲイエ（B. Geije）がライデンからシーボルト宛に請求書を送る。
- * 12月1日（11・4）時計職人・雑貨商ファン・アーケン（C. van Arcken）がアムステルダムからシーボルト宛に請求書を送る。
- 12月2日（11・5）ライデンにて, オランダ植民大臣（P.メイヤー）宛の手紙を書く。
- * 同日, コピイチャー？（Koppychaar）がシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, ルラスコ？（A. Lurasco）がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, デ・ムニック？（G. J. de Munick）がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 12月4日（11・7）ウォーターレウス（M. Waterreus）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, オランダ植民地省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, アルベルティーネ・ノルテがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 12月5日（11・8）アルベルティーネ・ノルテがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 12月9日（11・12）オランダ植民地省付武官がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- 12月12日（11・15）ライデンにて, オランダ植民大臣（P.メイヤー）宛の手紙を書く。

- *12月13日 (11・16) ハーケン・プロムドゥル (Haaken-Plomdeur) がリエージュ (Rieje) からシーボルト宛に書簡を送る。
 - *同日, S.マーテンブロードがアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
 - *12月17日 (11・20) J.エンシェンデ親子商会在ハーレムからシーボルト宛に請求書を送る。
 - *12月18日 (11・21) オランダ植民大臣 (P.メイヤー) がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
 - *12月22日 (11・25) アルベルティーネ・ノルテがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
 - *12月25日 (11・28) オランダの海軍士官 R.H.ファン・カッテンディーケがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
 - *12月28日 (12・2) カンプマン (Kampmann) がマリエンベルグからシーボルト宛に書簡を送る。
 - *12月31日 (12・5) D.デリモンがボンからシーボルト宛に請求書を送る。
 - *同日, マティアス・レムベルツ (Mathias Lempertz) 商会在ボンからシーボルト宛に請求書を送る。
 - *月日不詳, モーテ (G. Moote) がライデンからシーボルト宛に領収書を送る。
 - *月日不詳, ジーゲザール (Fr. Ziegesar) がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- 小冊子『1856年。フォン・シーボルト施設のライデン気候馴化園で栽培された日本の植物と種子の目録と価格表』(仏文とラテン語)をライデンおよびボンで出版。
- ◇幕府, 洋学所を改めて蕃書調所を設置。
- ◇アロー号事件, 第2次アヘン戦争起こる (~60年)。

1857年 (安政4年) 61歳

- *1月1日 (12・6) ヘベーレ (J. M. Heberle) がケルンからシーボルト宛に請求書を送る。
- *1月7日 (12・12) フンメル (Hummel) がボッパルト (Boppard) からシーボルト宛に書簡を送る。
- *1月17日 (12・22) J.メイがヴウルフエルディングン (Wulferdingen) からシーボルト宛に急送公文書を送る。

- * 1月20日 (12・25) シナツペリイク? (J. Synappelyk) がデルフトからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月26日 (1・1) オランダ植民地省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月10日 (1・16) カンプマンがマリエンベルクからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月17日 (2・23) ライデン大学植物学教授 W.H.デ・フリーゼがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月22日 (1・28) 海軍副官ブライザッハ (M. Breisach) がミラノからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月23日 (1・29) オランダ植民大臣 (P.メイヤー) がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月24日 (2・1) ルメール (C.h. Lemaire) がヘントからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月26日 (2・3) オランダ海軍士官 R.H.ファン・カッテンディーケがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月27日 (2・4) オランダ植民大臣 (P.メイヤー) がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月2日 (2・7) オランダ植民大臣 (P.メイヤー) がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月3日 (2・8) ドイツ人植物学者 J.K.ハッシカールがクレーベ (Cleve) からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月8日 (2・13) オランダの海軍士官 R.H.ファン・カッテンディーケがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月23日 (2・28) オランダ王子侍従 J.ラグートがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- 3月26日 (3・1) ボンにて、オランダ植民大臣 (P.メイヤー) 宛の手紙を書く。その中で、自然史、民族学、農業、園芸、芸術などに関するすべての事柄についてオランダ領東インド総督府に助言する許可を与えられるように要請、さらに東インドにおける政治的、科学的な性質をもつ、日本に関するすべての事態について、ジャワ滞在顧問役となることを求める (注: 横山伊徳『幕末維新論集7 幕末維新と外交』所収、マクリーン論文の訳文「シーボルトと日本の開国」1843-1866年64頁参照)。

- * 4月11日 (3・17) レイエン? (v.d. Leyen) がクレフェルト (Crefeld) からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 4月14日 (3・29) ゲントの園芸家アンブロワズ・フェルシャフェルト (Amvrose Verschaffelt) がゲントからシーボルト宛に納品書とリストを送る。
- * 4月17日 (3・23) フォン・ノイワール (M.E. von Neuwall) がウィーンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 4月24日 (4・1) オランダ植民地省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 4月29日 (4・6) ライン汽船航海会社 (ライン・デュセル共同会社) がロッテルダムからシーボルト宛に送り状を送る。
- * 5月4日 (4・11) ユールケ? (F. Jühlke) がシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月8日 (4・15) フランツ・グラザー・ジュニア (Franz Glaser junior) がパッサウ (Passau) からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月14日 (4・21) ツェカルマグリオ (Zuccalmaglio) がエルヴェルフェルト (Elverfeld) からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月20日 (4・27) シュロットテ (E. Schlotte) がブレーメン (Bremen) からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, シュメルツェル (Schmeltzer) がトリエール近郊のツルマイネン (Zurmainen bei Trier) からシーボルト宛に書簡を送る。
- 5月25日 (5・3) ボンにて, オランダ植民大臣 (P.メイヤー) 宛の手紙を書く。
- * 5月26日 (5・4) アレクサンダー・モンハウプト (Alexander Monhaupt) がツィーザーヴィツ (Zieserwitz) からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月28日 (5・6) Fr.フライシャー書店がライプツィッヒからシーボルト宛に書簡を送る。M.E. von.ノイワールがウィーンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月30日 (5・8) キナウ博士? がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇ 5月日付不詳, 江戸築地に軍艦教授所開設。
- * 6月6日 (5・15) オランダ植民地省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, ゲントの園芸家アンブロアズ・フェルシャフェルトがゲントからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 6月10日 (5・19) シュメルツァーがトリエール近郊のツルマイネンからシーボルト宛に書簡を送る。

- 6月21日（5・30）ボンにて、オランダ植民大臣（P.メイヤー）宛の手紙を書く。
- *同日、ゴベール博士（Dr. C. Gobeel）がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *6月23日（閏5・2）ヴィーガン（B. Wiegand）がステティン（Stettin）からシーボルト宛に書簡を送る。
- *7月1日（閏5・10）ヘンリー＝コーエン（Henry & Cohen）出版社がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *7月6日（閏5・15）Fr.A.ハーゲンがエルフェルトからシーボルト宛に書簡を送る。
- *7月25日（6・5）ハーレムのクレラーゲ親子園芸商会（H. Krelage & Sohn）がハーレム（Haarlem）からシーボルト宛に書簡を送る。
- *7月20日（閏5・29）モール（F. Moll）がコブレンツからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇7月23日（6・3）長崎製鉄所の建設機材類が長崎に着く。
- *7月日付不詳、ライデン大学植物学教授 W.H.デ・フリーゼがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *8月16日（6・27）ロイセ？（Leuce）がヘルヴォイツルイス（Hellvoitsluis）からシーボルト宛書簡を送る。
- *8月24日（7・5）H.ナロップがニーダーシェイムからシーボルト宛に収支書を送る。
- *9月2日（7・14）E.H.クレラーゲ親子園芸商会がハーレムからシーボルト宛に書簡を送る。
- *9月4日（7・16）園芸家アンブロワズ・フェルシャフェルトがアントワープからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇9月7日（7・19）軍艦教授所で観光丸を練習船に伝習開始。
- *9月8日（7・20）オランダ東インド総督（元オランダ植民大臣）パユウ・デ・モルトンゲス（Charles Ferdinand Pahud）がバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る。
- *9月10日（7・22）アントワープの園芸家アンブロワズ・フェルシャフェルトがアントワープからシーボルト宛に書簡を送る。
- *9月16日（7・28）アントワープの園芸家アンブロワズ・フェルシャフェルトがアントワープか

らシーボルト宛に書簡を送る。

- * 9月19日（8・2）ゲントの園芸家アンブロワズ・フェルシャフェルトがゲントからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月21日（8・4）ライン汽船航海会社（ケルン＝デュッセル共同会社）がロッテルダムからシーボルト宛に貨物の送り状を送付する。
- ◇ 9月22日（8・5）幕府発注のオランダ軍艦ヤパン（Japan 後の咸臨丸）長崎に到着。カッテンディケ（W.J.C. Ridder Huissen van Kattendijke）以下の第2次海軍伝習所教師団、ハルデス（Hendrik Hardes）以下活版印刷技師インデルマウル（G. Indermaur）ら長崎製鉄所建設要員到着。
- * 9月29日（8・12）ゲントの園芸家アンブロワズ・フェルシャフェルトがゲントからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月30日（8・13）フランツ・グラザー・ジュニア（Franz Glaser junior）がパッサウ（Passau）からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月2日（8・15）ヴィルヘルミーネ・フォン・ガーゲルン（Wilhelmine von Gagern）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月8日（8・21）ライプツィヒの園芸家H.ロウレンティウスがライプツィヒからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月11日（8・24）デ・ペレス（P. de Peres）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇ 10月15日（9・5）幕府発注のオランダ軍艦ヤパン（咸臨丸）引渡し。艦長カッテンディケら、海軍伝習生の教育に当たる。
- * 10月16日（8・29）ゲントの園芸家アンブロワズ・フェルシャフェルトがゲントからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月18日（9・1）ライプツィヒ（Leipzig）の園芸家ロウレンティウス（H. Laurentius）がライプツィヒからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月23日（9・6）オランダの海軍士官・長崎海軍伝習所教官 R.H.ファン・カッテンディケが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日、ウィッテ（H. Witte）がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月25日（9・8）ベールナウアー博士（Dr. W.F.A. Behrnauer）がウィーンからシーボルト宛に書簡を送る。

- *10月27日（9・10）ライデン大学植物学教授 W.H.デ・フリーゼがマルセイユ（Marseille）からシーボルト宛に書簡を送る。
- *10月28日（9・11）ファン・カエートハウベン博士（Dr. C. W. H. van Kaethoven）がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日，ゲントの園芸家ルイ・ファン・ハウテ（Louis van Houtte）がゲントからシーボルト宛に精算書を送る。
- *10月30日（9・13）園芸家エドワード・ヴァーレン（Eduard Warren）がシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月4日（9・18）ライプツィヒの園芸家 H.ロウレンティウスがライプツィヒからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇11月12日（9・26）ボンベが長崎海軍伝習所教官として，医学・理学・数学などの教授に当たる。
- *11月19日（10・3）アルベルティーネ・ノルテがパラマリボからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月25日（10・9）Fr.ジークザールがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇11月26日（10・10）長崎製鉄所（鮑の浦）建設に着手。
- *11月27日（10・11）オランダ植民地省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月29日（10・13）在日オランダ全権特使・商館長ドンケル・クルチウスが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 12月21日（11・12）在日オランダ全権特使・商館長ドンケル・クルチウスは，1829年のシーボルトの処罰が解かれたという知らせを書簡で受け取り，だだちにオランダ本国へ連絡する。
- 12月28日（11・13）在日オランダ全権特使・商館長ドンケル・クルチウスが出島からシーボルト宛に書簡を送り，処罰が解か



【図65】 在日全権特使・商館長ドンケル・クルチウスの肖像
（長崎県長崎図書館所蔵）

れたこと知らせる（注：前掲書所収，マクリーン論文の訳文『シーボルトと日本の開国』1843—1866年 70頁参照）。

- * 月不詳16日，ゲントの園芸家アンブロワズ・フェルシャフェルトがゲントからシーボルト宛書簡を送る。
- * 月不詳2日，プッセ？（Pusse）男爵がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 月不詳26日，ゲント植物協会副秘書・園芸家スパエ（D. Spae）がゲントからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇ 月日不詳，オランダの活版印刷技師 G.インデルマウルが出島オランダ商館の印刷業務に従事。
- 士官在勤35年功勞勲章を受ける。
- 『1857年，ライデン市にあるフォン・シーボルト商会の施設で栽培された日本植物の説明付き目録の要約と市価』3頁発行。
- ◇ 蕃書調所開校。
- ◇ 講武所内に軍艦教授所を置く（64年軍艦操練所と改称）。

1858年（安政5年） 62歳

- * 1月8日（11・24）オランダ植民大臣 P.メイヤーがハーグからシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書所収，マクリーン論文の訳文「シーボルトと日本の開国」1843—1866年65頁参照）。
- * 1月9日（11・25）園芸家 H.ロウレンティウスがライプツィヒからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月14日（11・30）メッツ商会（Metz & Co.）がベルリンからシーボルト宛に書簡を送る。
- 1月21日（12・7）ボンにて，オランダ王子ヘンドリック宛の手紙を書く。
- * 1月22日（12・8）メッツ商会がベルリンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月23日（12・9）オランダ植民大臣（P.メイヤー）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月25日（12・11）レオポルド・セリグマン（Leopold Seligmann）がコブレンツからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月30日（12・16）アルゲランダー（F. R. Argelander）がボンからシーボルト宛に

書簡を送る。

- 1月31日 (12・17) 『日本植物誌』(Flora Japonica) 発送に関して記述(メモ)する。
- * 2月2日 (12・9) オランダ植民大臣(P.メイヤー)がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月3日 (12・20) オランダ王子侍従J.ラグートがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, 書籍商Fr.フライシャーがライプツィヒからシーボルト宛に書簡を送る。またオランダ王子ヘンドリックがシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, フィッシュバッハ(H. Fischbach)がグリメンスレ・シャトウ(Chateau de Grimensler)からシーボルト宛に書簡を送る。
- 2月5日 (12・22) ボンにて, オランダ植民地省宛の手紙を書く。
- * 2月10日 (12・27) ライデンの王立自然史博物館館長・動物学者H.シュレーゲルがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月22日 (1・9) 海軍副官ブライザッハ(M. Breisach)がミラノからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月25日 (1・12) クラウツ博士(Dr. Krautz)がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- 3月1日 (1・16) ボンにて, オランダ植民大臣(P.メイヤー)宛に, 日蘭関係を改善するために日本事情に関する自らの知識を伝達したいという資料を送る(注: 前掲書所収, マククリーン論文の訳文「シーボルトと日本の開国」1843-1866年68-69頁参照)。
- 3月8日 (1・23) ボンにて, 「ドナウ学芸協会名誉会員入会証」(クロス・シャーフハウゼン署名)を送られる。
- * 3月10日 (1・25) ドイツの薬学者マルクァルト(L. C. Marquart)がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月22日 (2・8) H.ナロップがニーダーバイシェムからシーボルト宛に書簡を送る。
- 3月30日 (2・16) ライデンにて, オランダ植民大臣ロシュセン(J. J. Rochussen)宛の手紙を書く。
- * 4月7日 (2・24) オランダ植民大臣(J.J.ロシュセン)がハーグからシーボルト

宛に書簡を送る（注：前掲書所収、マクリーン論文の訳文「シーボルトと日本の開国」1843—1866年68—69頁参照）。

- 4月9日（2・26）ライデンにて、オランダ植民大臣（J.J.ロシュセン）宛の手紙を書く。
- * 4月11日（1・28）園芸家スタドニスキ（P. C. Stadniski）がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 4月14日（3・1）オランダ植民大臣（J.J.ロシュセン）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月18日（3・5）ライデンにて、オランダ植民大臣（J.J.ロシュセン）宛の手紙を書く。
- 4月19日（3・6）ライデンにて、園芸家P.C.スタドニスキ宛の手紙を書く。
- * 同日、ゲントの園芸家デ・コック（Aug. de Cock）がゲントからシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月24日（3・11）ボンにて、ボン大学評議会宛の手紙を書く。
- 4月29日（3・16）ボンにて、ライン行政区長宛の手紙を書く。
- * 5月5日（3・22）H.ナロップがニーダーバイシエムからシーボルト宛に書簡を送る。
- 5月11日（3・28）ライデンにて、オランダ植民大臣（J.J.ロシュセン）宛の手紙を書く。
- 5月22日（4・10）植民大臣（J.J.ロシュセン）に「日本貿易会社設立（長崎代理店）の計画案」を提案。全権代理人として長崎へ赴く意向があることを表明。
- 同日、ライデンにて、草稿『日本国のオランダ貿易会社の出島商館に関する構想』を執筆。
- * 5月27日（4・15）園芸家P.C.スタドニスキがアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 6月2日（4・21）フリードランデル＝息子商会（R. Friedlander & Sohn）がベルリンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 6月4日（4・23）オランダ植民大臣（J.J.ロシュセン）がハーグからシーボルト宛に通達（公文書）。
- * 6月7日（4・26）Fr.フライシャー書店がライプツィヒからシーボルト宛に書簡

と請求書を送る。

- * 同日、オランダ植民大臣（J.J.ロシュセン）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日、パウアー博士？（Dr. Baur）がサント・ペテルブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
- 6月9日（4・28）ボンにて、アムステルダムのオランダ通商会社宛の手紙を書く。
- ◇ 6月13日（5・3）幕府発注のオランダ軍艦エド（Jedo 朝陽丸）長崎に到着。
- * 6月19日（5・9）パウアー博士？がサント・ペテルブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
- 6月20日（5・10）ボンにて、アムステルダムのオランダ通商会社秘書官宛に、再来日に関する手紙を書く（注：呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』乙編 出島爪哇蘭語文書・訳文395-398頁参照）。
- * 7月7日（5・27）ブットゲン（S. A. Buttgen）がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 7月9日（5・29）S.A.ブットゲンがボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 7月13日（6・3）ブランド（A. Brandt）がサント・ペテルブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月14日（6・4）ボンにて、ゲオフロイ・セイント・ヒライレ（Geoffroy Saint Hilaire）宛の手紙を書く。
- * 7月15日（6・5）ドイツの薬学者 L.C.マルクアルト博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 7月17日（6・7）園芸家エシュバウム（Eschbaum）がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 7月19日（6・9）ボン大学評議会在がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月23日（6・13）ライデンにて、ボン大学評議会在宛の手紙を書く。
- ◇ 7月29日（6・19）日米修好通商条約締結。
- * 8月9日（7・1）オランダの海軍士官・長崎海軍伝習所教官カッテンディーケが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇ 8月18日（7・10）日蘭修好通商条約締結。
- ◇ 8月19日（7・11）日露修好通商条約締結。

- * 8月21日（7・23）ドゥ・エブレネスニール伯爵？（Comte. D' Eprenesnil）がパリからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇ 8月26日（7・18）日英修好通商条約締結。
- 8月29日（7・21）ライデンにて、ファン・ヘイムベルゲン（W. J. van Heymbergen）宛の手紙を書く。
- * 9月1日（7・24）ヘリングス（H. Th. C. Helling）がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月3日（7・26）ソウゲー？（M. M. Sougeh）がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月9日（8・2）W.J.ファン・ヘイムベルゲンがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月11日（8・5）H.Th.C.ヘリングスがアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月20日（8・14）ヴィクター商会（Victor & Co.）がアムステルダムからシーボルト宛に請求書を送る。
- * 9月23日（8・17）J.ゲーデンダハがアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月24日（8・18）ドゥ・マダム・ヴューヴ・ティエリオ出版社（Librarie de Mme Vve Thieriot）がパリからシーボルト宛に書簡を送る。オランダ王子ヘンドリックがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月27日（8・21）W.J.ファン・ヘイムスベルゲンがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇ 9月29日（8・23）幕府，外国奉行水野筑後守等アメリカ派遣を決定。
- * 9月30日（8・24）ドイツの薬学者L.C.マルクアルト博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月6日（8・30）ドイツの薬学者L.C.マルクアルト博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月9日（9・3）W.J.ファン・ヘイムベルゲンがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇ 同日，日仏修好通商条約締結。

- *10月16日（9・10）ミュンヘン大学哲学教授ヨハネス・フーバー（Prof. Johannes Huber）がシーボルト宛に書簡を送る。
- *10月18日（9・12）ミュンヘン大学哲学教授ヨハネス・フーバーがシーボルト宛に書簡を送る。
- *10月19日（9・13）ドイツの薬学者 L.C.マルクアルト博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- 10月中旬、草稿『植民地博物館構想に関する記述』（蘭文）執筆。
- △10月21日（9・15）岡泰安没する（享年63歳）。
- *10月27日（9・21）ドイツの薬学者 L.C.マルクアルト博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *10月30日（9・24）H.Th.C.ヘリングスがアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、シュメルメース（N. T. Schermers）がロンドンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *10月31日（9・25）ベリファンテ（A. Belifante）書店がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月1日（9・26）書籍商ノーマン親子商会（Joh. Noman en Zoon）がザルト・ボンメル（Zalt-Bommel）からシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月3日（9・28）ドイツの薬学者 L.C.マルクアルト博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇11月6日（10・1）観光丸気缶換装のため長崎へ。
- ◇11月12日（10・7）イギリス女王、ビクトリア（Victoria）、汽船エンペラー号（Empereur 蟠竜丸）を幕府に献上。佐賀藩発注のオランダ軍艦ナガサキ（Nagasaki 電流丸）長崎に到着。
- 11月14日（10・9）ライデンにて、アムステルダム（Amsterdam）在のビイラネック（G. H. Byranek）宛の手紙を書く。
- *11月17日（10・12）ヨーゼフ・ショルツ（Joseph Scholz）がシーボルト宛に請求書を送る。
- *11月18日（10・13）園芸家エシュバウム（F. A. Eschbaum）がボンからシーボルト宛に書簡を送る。

- *同日、ドイツの薬学者 L.C.マルクァルト博士がシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月19日 (10・14) ミュンヘン大学哲学教授ヨハネス・フーバーがシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月23日 (10・18) ライン行政区長がコブレンツからシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、ミュンヘン大学哲学教授ヨハネス・フーバーがシーボルト宛に書簡を送る。
- *12月1日 (10・26) フレデリック・ミュレル (Fr. Müller) 書店がアムステルダムからシーボルト宛に納品書を送る。
- 12月2日 (10・27) ライデンにて、アムステルダムのオランダ貿易会社宛の手紙を書く。
- *同日、Fr.フライシャー書店がライプツィヒからシーボルト宛に書簡を送る。
- *12月3日 (10・28) クラウツ博士 (Dr. Krautz) がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- 12月8日 (11・4) オランダ植民大臣 (J.J.ロシュセン) がライデン在住のシーボルト宛に書簡を送り、日本の国外追放解除を正式に通知する (注: シーボルト記念館『鳴滝紀要』1997年第7号41-42頁および前掲書所収、マククリーン論文の訳文『シーボルトと日本の開国』1843年-1866年70頁参照)。再来日にあたって、マインツ、ストゥットガルト、アムステルダム、ライデンの各都市から様々な品物を用意する (注: 呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』乙編出島爪哇蘭語文書の訳文420頁参照)。
- *12月9日 (11・5) ミュンヘン大学哲学教授ヨハネス・フーバーがシーボルト宛に書簡を送る。
- *12月10日 (11・6) ガラス実験器具製作者スペイヤー (J. Speyer) がアムステルダムからシーボルト宛に見積書を送る。
- *12月13日 (11・9) ヨーゼフ・ベア (Joseph Baer) がフランクフルトからシーボルト宛に請求書を送る。
- *12月14日 (11・10) ヨーゼフ・ベアがフランクフルトからシーボルト宛に書簡を送る。ドイツの薬学者 L.C.マルクァルト博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *12月18日 (11・14) デ・ポント男爵? (de Pont) がモンザ (Monza) からシーボルト宛に書簡を送る。
- 12月20日 (11・16) 再来日にあたって、オランダ通商会社に対して荷物の計算書を送る。

送り、事務手続きを終える（注：呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』乙編 出島爪哇蘭語文書の訳文420頁参照）。

- *12月22日（11・18）クラウツ博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- 12月25日（11・21）ライデンにて、アムステルダムのオランダ通商会社理事宛に手紙を書く（注：呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』乙編出島爪哇蘭語文書・訳文 398-403頁参照）。
- *12月27日（11・23）ヴィクター社（Victor & Comp.）がアムステルダムからシーボルト宛に請求書を送る。
- *12月30日（11・26）オットー・ペトリ（Otto Petri）がロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- 12月31日（11・27）再来日にあたって持参の印刷器具、文房具、図引用具などを用意する（注：呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』乙編出島爪哇蘭語文書の訳文420頁参照）。
- *月日不詳、ヴィクター・マッソン（Victor Masson）医学科学出版社がパリからシーボルト宛に書簡を送る。
- *月日不詳、園芸家 F.A.エシュバウムがシーボルト宛に請求書を送る。
- *月日不詳、ザーン兄弟商会（Gebr. Zahn）がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- △月日不詳、元出島オランダ商館員・シーボルト助手の H.ビュルゲルが没する（享年54歳）。
- 『園芸学と植物学年報』（仏文）シーボルトとドゥ・フリーゼ編をライデンにて出版。
- 『園芸学と植物学年報、もしくはオランダ王国の庭園の植物誌と東インドとアメリカのオランダ領土と日本におけるオランダ居留地の最も興味ある栽培植物と観賞植物の歴史』国王ウィレム2世陛下の庇護のもとオランダの国立園芸協会出版。Ph.Fr.ドゥ・シーボルトとドゥ・フリーゼ（W. H. de Vriese）編 第1部（仏文）をライデンのセイトホフ（A. W. Sijthoff）社刊行。
- 『1643年にフルート（Flute）船カストリーキュウム（Castricum）により、日本の東部および北部においてなしたマルテン・ヘリッツゾーン・フリース（Maerten Gerrits Vries）の発見に関する、また日本の東海岸に沿って蝦夷、樺太諸島、およ

び千島列島へ向う船員の案内として役立つための、地理学・民族学的解説』。アイヌ語およびアイヌ各地の物産に関する論文を収む。掲載書名「クーン (C. J. Coen) がカストリーキウム号上にて記した航海日誌による、日本の北部および東部への1643年のマルテン・ヘリッツゾーン・フリースの旅行。海兵隊長レウペ (P. A. Leupe) による重要な増補を加えた写本にもとづく刊本」。付図1葉と複製数種、蝦夷、樺太、千島列島への船員案内用地理学、民族学的注記、さらにP.F.フォン・シーボルト准男爵によるアイヌ語とアイヌ各地の物産に関する論文を収録。王立オランダ領インド言語、地理、民族学研究刊 (蘭文)。アムステルダムのF.ミュレル社刊行。

- 『日本の火山について、「宇宙」に使用されるよう希望してフォン・シーボルトのなせる報告』「アレクサンダー・フォン・フンボルト著「宇宙」、自然的世界記述の草案」巻4、シュトゥットガルトとテュービンゲンに掲載。
- 草稿『日本国のオランダ貿易会社の出島商館に関する草案』(蘭文)をライデンにて執筆。
- 『1858年、ライデン市にあるフォン・シーボルト商会の施設で栽培された日本植物の説明付き目録の要約と市価』9頁発行。
- ◇イギリス東インド会社解散。
- ◇井伊直弼、大老就任。日米修好通商条約調印。ついで蘭・露・英と修好通商条約締結。
- ◇安政の大獄始まる (~59年)。

4. 第2回来日と晩年 (ヨーロッパ) の活動

〈ヨーロッパから日本へ〉

1859年 (安政6年) 63歳

- * 1月6日 (12・3) ザーン兄弟商会がアムステルダムからシーボルト宛に書簡と請求書を送る。
- * 1月7日 (12・4) ドイツの薬学者L.C.マルクアルト博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日、ミュンツァー (Münzer)、シュベールおよびゲルスト (Schwehr & Gerst) 商

会がアムステルダムからシーボルト宛に請求書を送る。

- * 1月8日 (12・5) フレデリック・ミュレル (Frederik Müller) 書店がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- 1月9日 (12・6) ライデンにて、オランダ植民大臣 (J.J.ロシュセン) 宛の手紙を書く。
- * 1月10日 (12・7) ロッテルダムの船主・貿易商 A.ファン・ホボーケンがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月13日 (12・10) G.H.ピラネックがアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月14日 (12・11) ドイツの薬学者 L.C.マルクアルト博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日、オランダ植民大臣 (J.J.ロシュセン) がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月17日 (12・14) ザーン兄弟商会在アムステルダムからシーボルト宛に書簡と請求書を送る。
- * 1月20日 (12・19) ドルドレヒト (Dordrecht) のマリッツ (J.E.B.L. Maritz) がハーグからシーボルト宛に書簡と請求書を送る。
- * 1月24日 (12・21) ライデンの王立植物標本館館長 C.L.ブルーメがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月28日 (12・25) ロッテルダムの船主・貿易商 A.ファン・ホボーケン親子商会在ロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月29日 (12・26) ドイツの薬学者 L.C.マルクアルトがボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月30日 (12・27) ヨーゼフ・ベア (Joseph Baer) がサンクト・ペテルブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月31日 (12・28) ミュンヘン大学哲学教授ヨハネス・フーバーがシーボルト宛に書簡を送る。
- 1月日付不詳、日蘭通商条約改正案を日本に持参せよとの命を受け直ちに日本への旅の準備に入る。
- 2月1日 (12・29) ライデンからフォン・ブランド (von Brandt) 宛の手紙を書く。

- * 2月2日 (12・30) トラヴァグリノ? (Travaglino) がハーレムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月4日 (1・2) ウィルヘルム・ギルバース (Wilhelm Gilbers) がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月5日 (1・3) ピエール・ルゴウ (Pierre Regout) がマーストリヒトからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月7日 (1・5) フレデリック・ミュレル書店がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, ミュンツァー, シュベール=ゲルスト商会在アムステルダムからシーボルト宛に請求書を送る。
- * 2月9日 (1・7) ヨーゼフ・ベアがサンクトペテルブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月16日 (1・14) ピエール・ルゴウがマーストリヒトからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, 園芸家 P.C.スタドニッスキーがアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月17日 (1・15) オランダ植民地省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, シーボルト宛にブリュッセルからデ・ブラバント (de Brabant) 公爵拝謁用招待状と短信を送る。
- * 同日, ラムバーモント (Lambermont) がシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日, ウィルヘルム・ギルバースがアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- 2月21日 (1・19) ボンにて, アムステルダムのオランダ通商会社理事トラクラネン (Trakranen 生没年不詳) 宛に返書 (再来日にあたり, 日本への送品7箱の内容を報告) を書く (注: 前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編出島瓜哇蘭語文書の訳文 426-427頁参照)。
- * 同日, ライデンの王立自然史博物館館長・動物学者 H.シュレーゲルがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月22日 (1・20) クラウツ博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- 2月23日 (1・21) ボンにて, オランダ植民大臣 (J.J.ロシュセン) 宛の手紙を書く。

- *同日、ミュンヘン大学哲学教授ヨハネス・フーバーがシーボルト宛に請求書を送る。
- *2月24日（1・22）ミュンツァー、シュベール＝ゲルスト商会在アムステルダムからシーボルト宛に請求書を送る。
- *2月25日（1・23）ミュンヘン大学哲学教授ヨハネス・フーバーがシュトゥットガルトからシーボルト宛に書簡を送る。
- *2月26日（1・24）エドワード・ウェーバー書店（Eduard Weber）がボンからシーボルト宛に請求書を送る。
- *2月27日（1・25）リシュケ（Lischke）がエルバーフェルト（Elberfeld）からシーボルト宛に書簡を送る。
- *2月28日（1・26）オランダ植民地省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、ヨーゼフ・ベアがフランクフルトからシーボルト宛に両替証を送る。
- *同日、プットカメル（Puttkamer）がベルリンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、ペーターマン（A. Petermann）がシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、セイント・ゴーバイン（Saint Gobain）がアクシ・ラ・チャペル（Axi la Chapelle）からシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、ミュンツァー、シュベール＝ゲルスト商会在アムステルダムからシーボルト宛に請求書を送る。
- 3月2日（1・28）ボンにて、オランダ植民大臣（J.J.ロシュセン）宛の手紙を書く。
- *同日、印刷業サセンロート（C. Sassenroth）がセント・ゴール（St. Goar）からシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、ピエール・ルゴウがマーストリヒトからシーボルト宛に書簡を送る。
- 3月3日（1・29）ボンにて、印刷業C.サセンロート宛の手紙を書く。
- *同日、クラウツ博士がボンからシーボルト宛に書簡と招待状を送る。
- *同日、ドゥ・アルメ・ア・リージュ（d' Armers a Lieje）在のハーケンープロムドゥアー（Haaken-Plomdeur）がシーボルト宛に金額11,087.30フランの請求書を送る。
- *3月4日（1・30）デレイン？（Aug. Delain）がハンド（Hand）からシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、マックス・ライヒトリン（Max Leichtlin）がカールルーヘ（Carlsruhe）からシーボルト宛に書簡を送る。

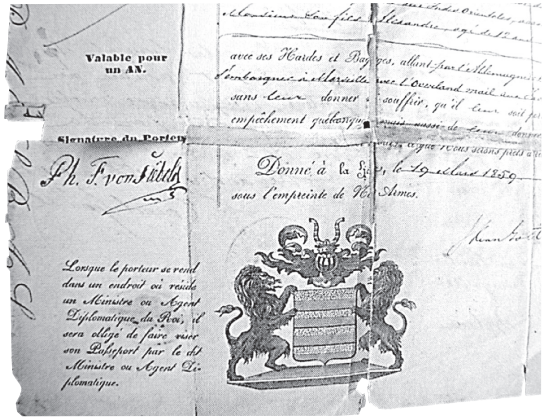
- * 3月9日（2・5）フレデリック・ミュレル書店がアムステルダムからシーボルトに書簡を送る。
- * 同日、ラモント？（Lamont）がミュンヘンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月10日（2・6）ミュンヘン大学哲学教授ヨハネス・フーバーがシュトゥットガルトからシーボルト宛に書簡と請求書を送る。
- * 3月11日（2・7）図版製作者（石版画家）・画材商テッシュ（P. E. Tesch）がコブレンツからシーボルト宛に書簡を送る。
- 3月12日（2・8）ボンにて、L.ロレ書店宛に請求書を送る。
- * 同日、セイント・ゴーバインがアクシ・ラ・チャペルからシーボルト宛に書簡を送る。
- 3月15日（2・11）ボンにて、L.ロレ書店宛の手紙を書く。
- * 3月16日（2・12）ミュンツェル、シュベール＝ゲルスト社がアムステルダムからシーボルト宛に請求書を送る。
- * 3月17日（2・13）ライデン大学植物学教授 W.H.デ・フリーゼがブリュッセルからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月18日（2・14）オランダ王子ヘンドリックがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日、ピエール・ルゴウがマーストリヒトからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月19日（2・15）ミュンツェル、シュベール＝ゲルスト社がアムステルダムからシーボルト宛に請求書を送る。
- * 3月20日（2・16）ウィルケンス（Th. F. Uilkens）がシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月21日（2・17）L.ロレ書店がパリからシーボルト宛に書簡を送る。C.H.ピラネクがハーグからシーボルト宛に短信を送る。
- 3月22日（2・18）ライデンにて、園芸家 P.C.スタドデニッスキー宛の手紙を書く。またライデンにて、「日本旅行」に際し別離の手紙を友人と庇護者、アカデミーと学会宛に書き、自らの意図を伝える（注：前掲書『シーボルト父子伝』ハンス・ケルナー著／竹内精一訳122-125頁参照）。
- * 同日、ライプツィヒの園芸家ロウレンティウス（J. H. Laurentius）がライプツィヒからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日、ミュンツェル、シュベール＝ゲルスト商会がアムステルダムからシーボルト

宛に請求書を送る。

- * 3月24日（2・20）園芸家 P.C.スタドニッスキーがアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日，J.グーデンダハがアムステルダムからシーボルト宛に書簡と請求書を送る。
- * 3月25日（2・21）ジョン・シェンク（John J. Schenck）がロンドンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月29日（2・25）ライデンの王立自然史博物館館長・動物学者 H.シュレーゲルがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月31日（2・27）オランダ植民地省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。



【図66】 1859年頃のシーボルト肖像



【図67】 シーボルト再渡来時の旅券の一部

（図66・図67ドイツ：フォン・ブランデンシュタイン家所蔵）

- * 4月2日（2・29）H.ナロップがニーダーバイシウムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 4月3日（3・1）ローレンツ（C. A. Lorenz）がヘルスタイン（Herrstein）からシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月4日（3・2）ボンからベルギー王国外務大臣宛の手紙を書く。
- * 同日，カール・ショッピング（Carl Schopping）がデュセルドルフからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 4月5日（3・3）オランダ植民大臣 J.J.ロシュセンがハーグからシーボルト宛に

書簡を送る。

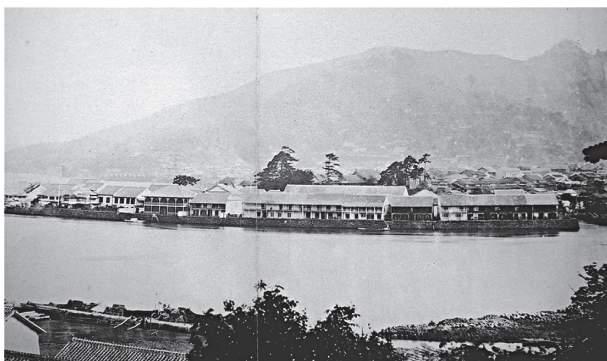
- 4月6日 (3・4) 草稿『フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト自筆遺書』(独文)を妻ヘレーネ宛にボンで執筆。
- 4月日付不詳, 長男アレクサンダー (13歳) と共に, ボンを出発。パリを経てマルセーユへ。シーボルトの留守中, 彼のコレクションはライデンの王立民族学陳列館館長C. レーマンス博士が管理。
- 4月10日 (3・8) ベルリンの自然研究者アレクサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt) 男爵がベルリンからシーボルト宛の書簡(注: 3月22日付で, シーボルトがライデンで書いた「日本旅行」に際しての別離の手紙)の返信を送る(注: 竹内精一訳『シーボルト父子伝』125-127頁およびヴォルフガングゲンショレク『評伝シーボルト』— 日出づる国に魅せられて — 214-217頁参照)。
- 4月12日 (3・10) 妻ヘレーネ宛に大きな癩(外科的疾患)ができ, 高熱で苦しむと手紙に書く(注: ヴォルフガングゲンショレク『評伝シーボルト』— 日出づる国に魅せられて — 220頁参照参照)。
- 4月13日 (3・11) マルセーユでイギリス船タイガー (Tiger) 号に乗船。その後, アレクサンドリア・スエズ・アデン・ポアンドカルを経由してシンガポールへ。シンガポール滞在時に, 中国商人の家の庭で, センニンズギ数株を見る。シンガポールからバタヴィアに赴く。同地でドゥ・ヴィルヌーヴと再会。バイテンゾルフへ旅行。総督公邸と植物園を訪ねる。シンガポールに戻りロシア船ルーシー・ハリエット (Lucy-Harriet 号船長フォン・フントルン von Hunteln) で上海に向かう。
- * 4月28日 (3・26) ライデン大学植物学教授 W.H.デ・フリーゼがソロ (Solo) からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月2日 (3・30) ランバース (Lambermont) がシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月5日 (4・3) マドラー (Madler) がドルパト (Dorpat) からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月10日 (4・8) レヴィ・エルカン・バウマー商会 (Levy Elkan Baumer & Co.) がデュセルドルフからシーボルト宛に請求書を送る。
- * 5月17日 (4・15) ベルギー外務省がブリュッセルからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月18日 (4・16) カール・ショッピングがデュセルドルフからシーボルト宛に請求書を送る。

- * 5月20日（4・18）ライデンの気候馴化園の庭師ハクビル（Atrahem Hakbyl）がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月22日（4・20）元出島オランダ商館員 C.H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 5月27日（4・25）オランダ領東インド総督 C.F.パユウがバイテンゾルフ（Buitenzorg）からシーボルト宛に書簡を送る。ライデンの王立民族学陳列館館長レーマンス博士（Dr. C. Leemans）がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 同日、デ・セイフ K. F. de Seyff とオランダの植物学者シモン・ビンネンディク（J. Simon Binnendijk）がバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 6月1日（5・1）ヴェルツブルグ地方裁判所所長デアルフアー（Georg Doerffer シーボルトのメナーニア会友人）がヴェルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
- 6月3日（5・3）バイテンゾルフにて、オランダ通商会社社長宛の手紙とリストを書く。
- * 6月6日（5・6）ライデン大学植物学教授 W.H.デ・フリーゼがバタヴィアからシーボルト宛にバタヴィア発シンガポール行き船賃の請求書を送る。
- 6月13日（5・13）ロシア帆船ルーシー・ハリエット（Lucy-Harriet）号船長フォン・フンテルン（von Hunteln）から乗船のシンガポール～上海間の運賃（2名分125ドル）の領収書を受け取る。
- * 同日、バイテンゾルフからオランダ通商会社社長宛の公式書簡を書く。
- * 7月3日（6・4）ナタリー・ビニエール？（Natalie Binier）がマカオからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 7月4日（6・5）オランダ通商会社駐日筆頭代理人ボードウィン（A. J. Baudin）が出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月17日（6・18）ロシア東部シベリア提督ムラヴィエフ（Murawieff）宛の手紙を書く。
- 同日、シーボルト・コレクションはライデンのプレートストラート（Breetstraat）の建物内に移管され、「国立シーボルト日本博物館」として一般公開される。
- 7月23日（6・24）上海駐在オランダ領事テオドール・クルース（Theodore Kroes）と会い、数週間上海に滞在。同地で草木や花や種子など18種を採集し目録を作成。
- * 7月24日（6・25）ボウゾン？（Bouzon）が香港からシーボルト宛に書簡を送る。

- * 7月日付不詳，ナタリー・ビニエール？がマカオからシーボルト宛に書簡を送る。
 - * 8月1日（7・3）ライデンの気候馴化園とシーボルトの邸宅「ニッポン」管理者、造園技師ヤコブ・マター（Jacob Mater）がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇月日不詳，雑記帳『シンガポールから上海の旅1859年』3冊ほか，関連の雑記帳1冊および草稿『バタヴィアから日本への旅行に関する備忘用雑記』を執筆。

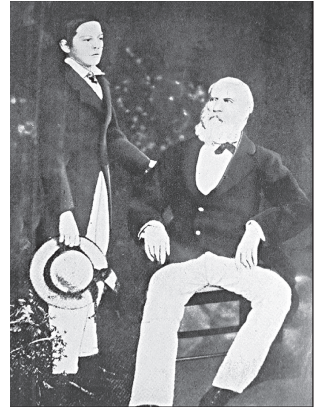
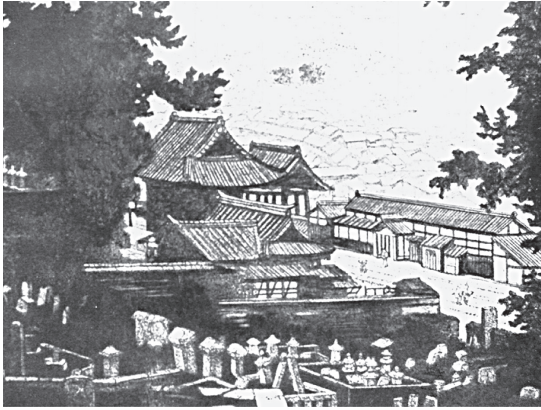
〈長崎滞在〉

- * 『シーボルト自筆：1861年蘭独日記および覚書・メモ類』参照・作成。
- 8月4日（7・6）イギリス汽船イングランド（England）号でオランダ通商会社顧問として，長崎港に入港（30年ぶりの来日）。



〔図68〕出島遠景（F.ベアト『幕末日本写真集』より）

- 8月6日（7・8）長男アレクサンダーを伴って，出島の水門から上陸。商館長ドンケル・クルティウス宅へ。
- * 8月8日（7・10）ライデンの気候馴化園とシーボルトの邸宅「ニッポン」の管理者，造園技師ヤコブ・マターがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- 8月9日（7・11）出島にて，長崎奉行（岡部駿河守）宛の手紙を書く。
- 8月16日（7・18）長崎奉行岡部駿河守と会見。
- 8月21日（7・23）シーボルト父子，本蓮寺一乗院（現在の長崎市筑後町）に移る。



〔図69〕本蓮寺一乘院（右側）とシーボルトと息子アレクサンダー再来日時滞在中の写真（小澤敏夫訳註『シーボルトの最終日本紀行』より）

〈本蓮寺一乘院〉

- 8月26日（7・28）勘定奉行所にいる村上チョウゾウ（Murakami Tsjo sô）が来訪。
- 8月27日（7・29）長崎の町医者吉雄幸載が来訪。
- * 8月28日（7・30）出島オランダ商館筆者兼荷倉役・一等官補バスラー（Bassler）が出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- △ 8月日付不詳，三瀬周三門人となる。
- 8月日付不詳，長崎から長崎奉行（岡部駿河守）宛の手紙を書く。
- 9月1日（8・5）奥医師松本良順来訪。栗本鋤雲のこと，および紙についての簡単な記述。
- * 同日，図版製作者（植物描写石版師）S.ミンシンゲルがミュンヘンからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月2日（8・6）ホッジン？（Hodgyn）がシーボルト宛に書簡を送る。
- 9月3日（8・7）気象観測。
- 9月4日（8・8）長崎からロシア東部シベリア提督ムラヴィエフ宛の手紙を書く。
- * 9月5日（8・9）オランダの海軍士官・長崎海軍伝習所教官カッテンディーケがシーボルト宛に書簡を送る。
- 同日，コブレンツにて，シーボルト家が「ポッパルト近郊ザンクト・マルティーン

のシーボルト家財産の政府に対する売却に関する契約書」(署名者フリードリッヒ・アルトフ Friedrich Arthoff / フォン・シーボルト Fr. von Siebold およびヘレーネ・イダ Helene Ida geb. フォン・ガーゲルン von Gagern) を交わす。

○9月6日(8・10)長崎本蓮寺にて、アムステルダムのオランダ通商会社理事宛の手紙を書く(注:前掲書『シーボルト先生及功業』乙編出島爪哇蘭語文書の訳文 439-441頁参照)。

*同日、長崎奉行の医師オオゾノリュウコウ(Wōzono rijko)と大村藩主の侍医尾本公同、筑前藩士河野禎造ら来訪。

○9月9日(8・13)ある処刑された罪人の死体解剖についての記述。

○9月12日(8・16)大村藩主の侍医尾本公同来訪。

○9月13日(8・17)芸をするヤマガラについての記述。

○9月14日(8・18)出島の植物園について、洋紙に詳細な覚書(出島の植物園は貿易促進のため全滅し、ほとんど跡形もないことに嘆く)。

*同日、オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

○9月15日(8・19)大村藩主の侍医尾本公同から筑前産の銅鋳を貰う。

○9月17日(8・21)愛妻ヘレーネの誕生日を祝う。

○9月21日(8・25)筑前藩士河野禎造と大村藩主の侍医尾本公同が来訪。数か月以内に筑前侯が長崎に来て、シーボルトを訪ねることを知らせる。

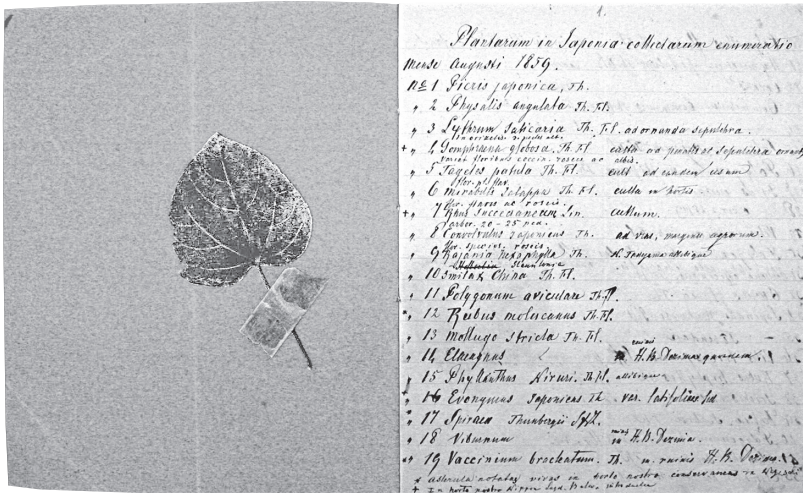
○9月22日(8・26)長崎本蓮寺にて、アムステルダムのオランダ通商会社理事宛の手紙を書く(注:前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編 出島爪哇蘭語文書の訳文 443-444頁参照)。サハリン島がロシア人に割譲されたという噂が広がる、と簡単に記述。

○9月23日(8・27)ボンのマルクス出版社宛に日本の調査研究に意欲を示す手紙を書く。

○9月24日(8・28)門人二宮敬作が皮下脂肪の腫瘍手術を施したという記述。

○9月27日(9・2)祭の祝いについての簡単な記述。

○8月から9月頃、長崎付近で採集・観察した「263種の植物目録」を作成する。

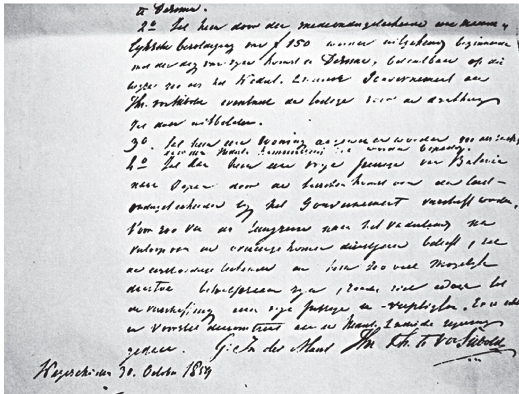


〔図70〕 1859年8月～9月に長崎付近で収集・観察の日本植物観察目録の一部
 (ボフム大学図書館所蔵 No: 1.208.000)

- * 9月日付不詳，筑前藩士河野禎造がシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月1日（9・6）ゲルマントウ（U.S.S. Germantow）がシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月4日（9・9）ユトレヒト州芸術学術協会がユトレヒトからシーボルト宛に領収書を送る。
- * 10月7日（9・12）ライデンの気候馴化園・シーボルト邸宅「ニッポン」の管理者・造園技師ヤコブ・マター（Jacob Mater）がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- 10月16日（9・21）本蓮寺にて，来訪の筑前藩主黒田長溥を診察（注：病名「慢性遷延リュウマチス」，この「シーボルト処方箋」については，現在，福岡県立図書館寄託「武谷文庫」）。
- * 10月22日（9・27）パジェー・レオン（Pagee Leon）がパリからシーボルト宛に書簡を送る。
- 10月23日（9・28）長崎にて，オランダ東インド総督（C.F.パユウ）宛の手紙を書く。
- * 10月25日（9・30）在日オランダ全権特使・商館長ドンケル・クルチウスが出島か

ら、またオランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

- 10月30日 (10・5) 長崎にて、活版印刷技師インデルマウル (G. Indermauer) と印刷事業に関する合意文書を作成する。同日、オランダ領東インド総督 (C.F.パユウ) 宛に印刷事業を開始するにあたって、財政的援助を要求する手紙を書く。

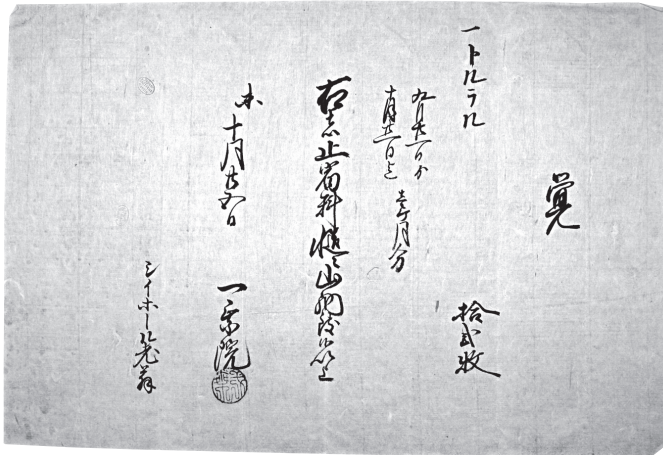


【図71】シーボルトとインデルマウルとの印刷事業に関する合意文書の一部 (フォン・ブランデンシュタイン家所蔵)



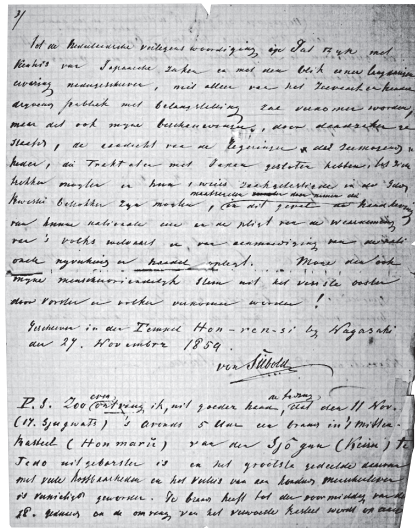
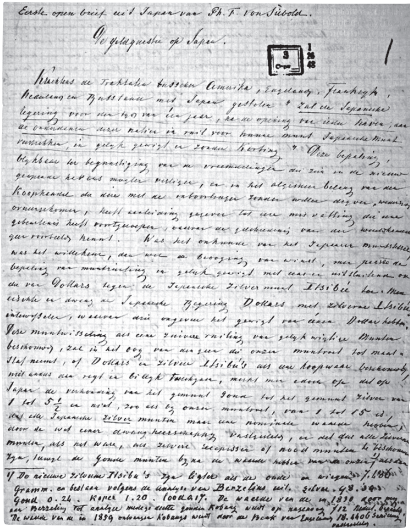
【図72】オランダ領東インド総督パユウ (フォス・美弥子編訳『海国日本の夜明け』より)

- 11月3日 (10・9) 本蓮寺一乗院からシーボルト宛に書簡 (家賃の取り決めなど) を送る。本蓮寺一乗院の家賃, 建具付き2ヵ月分 (7・21~9・1まで) 40ドルを支払う。
- ◇11月4日 (10・10) W.J.C.カッテンディケら帰国。H.ハルデス, ポンペ・ファン・メーデルフォールトは残留する。
- *11月8日 (10・14) 出島オランダ商館筆者兼荷倉役・一等官補 G.A.C.バessler が出島からシーボルト宛に領収書を送る。
- 11月9日 (10・15) 二宮敬作の門人で、讃岐出身のショウノリョウエイ (Sjōno riō-jei) に植物と貝類の収集を依頼。
- *同日, 書籍商バesslerが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇11月11日 (10・17) 江戸城本丸火災。



〔図73〕 本蓮寺一乗院からシーボルト宛の家賃取り極めの覚
（ボフム大学図書館所蔵 No：1.511.000）

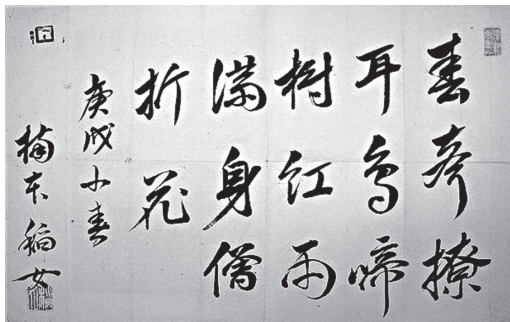
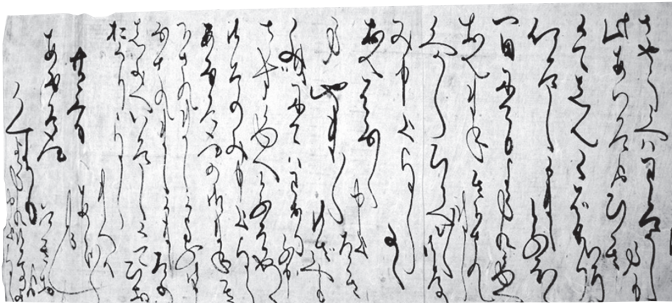
- *11月14日（10・20）オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月15日（10・21）ザーン兄弟商会在アムステルダムからシーボルト宛に領収書を送る。
- 11月16日（10・22）肥後の商人竹崎律次郎と肥後地方の有名な火山のこと、木材の提供を依頼するなどを話し合う。
- 11月19日（10・25）本蓮寺一乗院の家賃1ヵ月分（9・21～10・21）12ドルを支払う。
- *11月20日（10・26）ライデンの気候馴化園の庭師 A.ハクビイルがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月23日（10・29）オランダ通商会社駐日筆頭代理人ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 11月24日（11・1）シーボルトが東中町の鰻屋へ9貫66文を支払う（2回払い）。
- 11月27日（11・4）本蓮寺にて、小論文「日本における金の問題について」〔第一公開状〕執筆（のち他の三篇の小論文とともに、1861年出島オランダ印刷所で『日本からの公開状』として出版）。



[図74] 本蓮寺一乗院にて執筆の「日本における金の問題について」の原稿
 (ボウム大学図書館所蔵 No : 1.381.000)

- 12月1日 (11・8) 本蓮寺にて、長崎奉行(岡部駿河守)宛の手紙を書く。
- *12月4日 (11・11) フェルラー (Huerler) がベルリンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *12月10日 (11・17) N.ビニエール?がマカオからシーボルト宛に書簡を送る。
- 12月11日 (11・18) 長崎にて、ピラネク? (H. I. Bijranek) 宛の手紙を書く。
- *12月12日 (11・19) オランダ海軍士官・前長崎海軍伝習所教官カッテンディーケが蒸気船バンダン号船上からシーボルト宛に書簡を送る。
- *同日、アーイツ社 (Arnz & Comp.) がデュッセルドルフからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇12月16日 (11・23) ライデンの王立民族学陳列館館長C.レーマンス博士が草稿『シーボルト日本博物館に関する記述』をライデンにて執筆。
- 12月18日 (11・25) 本蓮寺一乗院の家賃1ヵ月分12ドルを支払う。
- *12月20日 (11・27) ピエール・ルゴウがマーストリヒトからシーボルト宛に書簡を送る。

- *12月26日（12・3）ライデンの王立民族学陳列館館長C.レーマンス博士がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *12月28日（12・5）オランダ通商会社駐日筆頭代理人A.J.ボードウインが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- *12月29日（12・6）アルベルティーネ・ノルテがゲッチングェンからシーボルト宛に書簡を送る。
- *月日不詳，ザーン兄弟商會がアムステルダムからシーボルト宛に請求書を送る。
- 月日不詳，草稿『バタヴィアから日本への旅行に関する備忘用雜記』（独文）執筆。
- ◇たき・イネ母子，門人二宮敬作と再會。



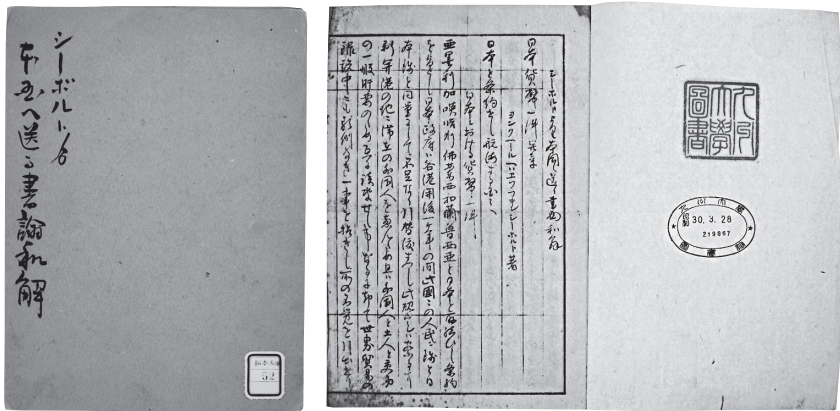
〔図75〕 上側「楠本たきの書状」（安政元年10月頃）と
 下側「イネのの書蹟」（庚戌小春：1850年11月頃）
 （ボウム大学図書館所蔵 No：0-1.0-4）

- ◇オランダ通商会社，長崎で業務開始。江戸の長応寺に外交代表部を置く。
- ◇ベルギーのレオポルド勲章上級勲爵士（Leopold Roi des Belges）を受ける。
- ◇アントワープ所在，植物協会名誉会員。ハーグ所在，インド協会名誉会員。

1860年（万延元年） 64歳

- * 1月6日（12・14）オランダ領東インド総督（C.F.パユウ）がシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月9日（12・17）メットマン（J. P. Metman）バタヴィア（Batavia）からがシーボルト宛に書簡を送る。
- 1月10日（12・18）夜、本蓮寺一乗院のシーボルト寝室で発生した火災で、不運にも両手を火傷。同月30日まで重体で病床につく。
- 1月13日（12・21）山伏たちの冬の修行についての記述。
- 1月17日（12・25）本蓮寺一乗院の家賃1ヵ月分12ドルを支払う。
- * 1月18日（12・26）オランダ通商会社駐日筆頭代理人A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 1月22日（12・30）門人三瀬周三がシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』88頁参照）。
- * 1月26日（1・4）オランダ領東インド総督（C.F.パユウ）がバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る。同日付の第6号オランダ領東インド総督府の決定によって、出島の印刷事業の創設と維持のために、無利子で前貸金として10,000グルデン受領することになる。さらに2年間、毎年4,000グルデンを受取ることになり、1863年1月26日から4月26日までの期間に、前貸金分を払い戻す義務を負う。
- ◇ 2月4日（1・13）木村撰津守喜毅、勝海舟らが咸臨丸でアメリカへ出発。
- * 2月8日（1・17）オランダ人シュート（J. Schut）が出島からシーボルトへ書簡を送る。
- * 2月11日（1・20）デ・ワール（W. de. Waal）、メットマン（J. P. Metman）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇ 2月13日（1・22）日米修好通商条約批准交換の遣米使節がアメリカ軍艦ポーハタン（Powhatan）号に搭乗し神奈川からアメリカに向かう。
- * 2月14日（1・23）オランダ通商会社駐日筆頭代理人A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月15日（1・24）オランダ通商会社筆頭駐日代理人A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月20日（1・29）オランダ通商会社駐日筆頭代理人A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

- 2月21日（1・30）気象観測の簡単な記述。
- 2月28日（2・7）長崎本蓮寺にて、「筑前侯（黒田長溥）の好意で受贈した植物の目録」を作成する。
- ◇2月日不詳，長崎オランダ通詞荒木熊八がシーボルト執筆「日本における金の問題について」の原文を、「シーボルトより本国迄送候書面和解：日本貨幣一件開章」と題して翻訳し，これを長崎奉行岡部駿河守より老中へ提出する（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編128-131頁参照）。



〔図76〕「シーボルトより本国迄送候書面和解：日本貨幣一件開章」
（九州大学記録資料館九州文化史資料部門所蔵「松木文庫」No：52）

- 3月5日（2・13）オランダ領東インド総督（C.F.パユウ）宛の手紙を書く。
- *同日，オランダ通詞植林榮左衛門，シーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』72-73頁参照）。
- 3月12日（2・20）長崎にて，草稿『石炭供給に関するいくつかの質問』（蘭文）を執筆。
- *3月16日（2・24）スイス通商関税局代表・プロシア商人ルドルフ・リンダウ（Rudolf Lindau）が神奈川からシーボルト宛に書簡を送る。
- 3月17日（2・25）本蓮寺一乗院の家賃1ヵ月分12ドルを支払う。
- *3月23日（3・2）上海駐在オランダ領事T・クルースがシーボルト宛に書簡を送る。

- ◇ 3月24日 (3・3) 大老井伊掃部頭直弼が桜田門外で水戸浪士らに暗殺さる。
- * 同日, ヴェッカーリン (Weckkerlin) がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月29日 (3・8) オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月1日 (3・11) 長崎奉行 (岡部駿河守) 宛に手紙を書き, 保税倉庫の建設を献言する。
- 4月3日 (3・13) 長崎にて, オランダ内務大臣 (ファン・ヘームストラ S.van Heemstra) 宛の手紙を書く。
- 4月9日 (3・19) イギリス蒸気船「ヤンツー (Yantzu) 号」で上海から長崎に到着した香港のジョージ・スミス (George Smith) 主教がシーボルトに会い石版刷りの長崎市街の地図を見せてもらい, 町の人口や寺院の数などの説明を受ける。
- * 4月12日 (3・22) 駐日オランダ総領事デ・ウィット (de Witt) が出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月15日 (3・25) 本蓮寺一乗院の家賃1ヵ月分12ドルを支払う。
- * 4月16日 (3・26) ヴィクトリア (G. Victoria) が長崎からシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月18日 (3・28) 本蓮寺にて, 小論文「金貨小判の高騰—日本におけるオランダ貿易の現状と予測」〔第二公開状〕執筆。
- * 同日, G.ヴィクトリアが長崎からシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月20日 (改元3・30) オランダ内務大臣宛の手紙を書く。
- * 同日, オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月30日 (閏3・10) 草稿『日本博物館展示品解説』(蘭文) 長崎にて執筆。
- * 同日, オランダのライデン王立民族学陳列館館長 (C.レーマンス博士) 宛の手紙を書く。
- 5月7日 (閏3・17) 出島にて, オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィン宛に手紙を書く。
- * 5月8日 (閏3・18) 門人三瀬周三がシーボルト宛に書簡を送る (注: 前掲書『シーボルト関係書翰集』88—89頁参照)。東洋アメリカ民族協会がパリからシーボルト宛に書簡を送る。

- * 5月13日（閏3・23）G.ヴィクトリアが長崎からシーボルト宛に書簡を送る。
- 5月14日（閏3・24）駐日オランダ総領事デ・ウイット宛の手紙を書く。
- 5月15日（閏3・25）本蓮寺一乗院の家賃1ヵ月分12ドルを支払う。
- * 5月19日（閏3・29）長門周防藩付海軍司令戸田亀之助がシーボルト宛に書簡を送る（前掲書『シーボルト関係書翰集』123-124頁参照）。
- * 5月20日（閏3・30）オランダ領東インド総督府のオランダ人植物学者・庭師のビンネンディク（J. Binnendijk）がバイテンゾルフ植物園からシーボルト宛に書簡を送る。
- 5月23日（4・3）出島にて、長崎奉行（岡部駿河守）宛に手紙を書き、自分はA.J.ボードウィンが設立したオランダ通商会社代理店の顧問であると知らせる。同会社は蒸気船、蒸気機関も武器も供給できるので、武器の一覧も同封し、また水ガラスの瓶も送る（注：前掲書所収、マククリーン論文の訳文「シーボルトと日本の開国」1843-1866年74-75頁参照）。
- 5月24日（4・4）長崎にて、筑前侯（黒田長溥）宛の手紙を書く。
- * 5月30日（4・10）門人三瀬周三が本蓮寺からシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』89-90頁参照）。
- 5月日付不詳（閏3月）シーボルト、（支払先不明）第1の分ヘラスギ以下9種総額9貫900文、第2の分ヨコスラン以下5種（小計1貫498文）、コツバアキ以下3種（小計800文）・タニモミジ以下4種（小計848文）・ナギノキ以下3種（小計900文）、惣高メ4貫文支払う。
- 6月1日（4・12）本蓮寺にて、小論文「オランダ王国海軍の分遣隊—日本における海軍士官教育、および創立に関するその実地修練ならびにその王国における一海軍の発達のために—」〔第三公開状〕執筆。
- * 同日、L.ロレ書店がパリからシーボルト宛に請求書を送る。
- 6月4日（4・15）シーボルトが「板柳」（屋号）にマツ、スギの板など5種13貫24文と他の1種1貫文、合計14貫24文支払う。
- * 6月11日（4・22）オランダ副領事代理J.P.メットマンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 6月12日（4・23）出島オランダ商館筆者兼荷倉役・一等官補バesslerが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

- * 6月14日（4・25）オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。儀助がシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』126-127頁参照）。
 - * 6月15日（4・26）L.ロレ書店がパリからシーボルト夫人〔ヘレーネ〕宛に書簡を送る。
 - * 6月23日（5・5）オランダ人（のち横浜居留地取締官）マルティン・ドーマン（Martin Dohmen）が神奈川からシーボルト宛に書簡を送る。
 - * 6月27日（5・9）オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 6月下旬から7月初旬ごろ、本蓮寺一乗院から鳴滝の旧宅を娘イネの名義で買い戻して移り住み、再び植物園設ける。

〈本蓮寺一乗院から鳴滝の別荘へ〉



〔図77〕 鳴滝別荘の全景（左側）と鳴滝別荘隣の農家（右側）
（長崎大学経済学部図書館所蔵）

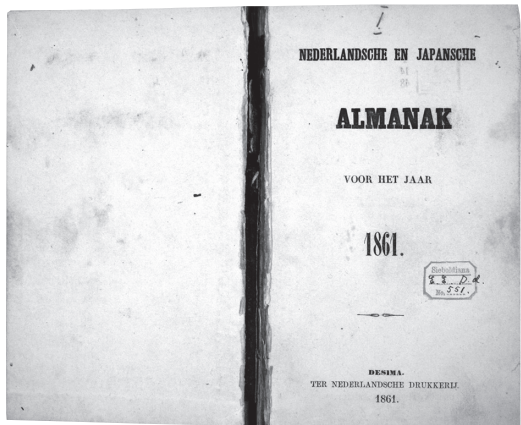
- 6月から7月ごろ？、オランダ通詞北村元助宅を訪ねて、庭園植物を観察する（シーボルト自筆『蘭独混合文日記』より）。
- * 7月1日（5・13）ファン・ザマーレン（C. van Zameren）が出島からシーボルト宛に書簡を送る。
 - * 7月2日（5・14）門人三瀬周三が本蓮寺からシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』90-91頁）。

- * 7月4日（5・16）娘イネがシーボルト宛「受領の医療用器具」についての書簡を送る。
- 7月5日（5・17）本蓮寺一乗院の家賃半月分6ドルを支払う。
- * 7月13日（5・25）スイス通商関税局代表・プロシア商人ルドルフ・リンダウが上海からシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月14日（5・26）長崎にて、オランダ通商会社筆頭代理人A.J.ボードウィン宛の手紙を書く。
- * 7月17日（5・29）門人三瀬周三が鳴滝からシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』92-93頁）。
- * 7月19日（6・2）在日オランダ全権特使・出島オランダ商館長J.H.ドンケル・クルチウスが江戸からシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月20日（6・3）長崎にて、駐日オランダ総領事デ・ウィット宛の手紙を書く。
- * 同日、出島オランダ印刷所活版印刷技師インデルマウル（G. Indermaur）が出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 7月21日（6・4）ピエール・ルゴウがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月25日（6・8）草稿／リスト『種々の武器リスト』（蘭文）出島にて執筆。同日、オランダ領東インド政庁から出島の印刷事業の創設と維持のために、前貸金4,000グルデンを受け取る。
- 7月26日（6・9）出島から長崎奉行支配組頭（依田克之丞）宛の手紙を書く。
- * 7月31日（6・14）アメリカ人ウイリアムス（C. M. Williams）が出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 7月（日付不詳）ドイツ商人ギルデマイスター（M. H. Gildemeister）が出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 8月1日（6・15）オランダ領東インド総督（C.F.パユウ）宛の手紙を書く。
- * 8月2日（6・16）町田かん助がシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』127-128頁）。
- * 8月3日（6・17）オランダ人M.ドーマン（のち横浜居留地取締官）が神奈川からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 8月7日（6・21）天草在住の団吉がシーボルト宛に書簡（門人三瀬周三翻訳筆）を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』132-133頁参照）。

- * 8月10日（6・24）スイス通商関税局代表・プロシア商人ルドルフ・リンダウが上海からシーボルト宛に書簡を送る。
- 8月12日（6・26）鳴滝の別荘にて、小論文「江戸における御大老，最高政治評議員，井伊掃部頭の死について—歴史的，政治的観点からみて—」〔第四公開状〕執筆。
- 8月25日（7・9）オランダ領東インド総督府（オランダ領東インド総督パユウ）から出島の印刷事業の創設と維持のために，3,000グルデンを受け取る。
- 8月26日（7・10）眼科医高石淡斐がシーボルトと会い，挨拶の品として「蒔絵五段重箱一組 但替蓋添」と「十三焼菊形蓋物壺」の二品を贈る。
- 8月31日（7・15）息子アレクサンダーと共に長崎の立山溪谷の小さな森を散策。
- 8月日付不詳，オランダ領東インド総督府の命により，出島オランダ印刷所を開設（「出島オランダ印刷所パンフレット」作成）。〔注：石山禎一「研究ノート：シーボルトが創設した出島オランダ印刷所」、『法政史学』第71号2009年3月参照〕。



〔図78〕 出島オランダ印刷所パンフレット（フォン・ブランデンシュタイン家所蔵）



〔図79〕『蘭日便覧付日記帳』（ボフム大学図書館所蔵 No. 1.551.000）

- 8月日付不詳、『蘭日便覧付日記帳』出島オランダ印刷所で出版
- ◇ 9月4日（7・19）プロシア遠征艦隊アルコナ（Arcona）号（使節オイレンプルグ伯爵 Graf August zu Eulenburg, 艦長ズンデヴァル Sundewal 海軍少将）江戸沖合に投錨する。
- * 9月5日（7・20）ロッテルダム船主・貿易商 A.ホボーケンがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月15日（8・1）オウドリー・ポポン？（Audrey Popon）がシーボルト宛に書簡を送る。
- 9月20日（8・6）長崎奉行（岡部駿河守）宛に手紙を書き、対馬全島あるいはその一部をイギリス、フランス、中国へ海軍基地としての利用のために譲渡するのを拒否すべきと日本へ勧告する（注：前掲書所収、マクリーン論文の訳文「シーボルトと日本の開国」1843-1866年75頁参照）。
- * 同日、通詞榎林栄左衛門がシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』72-73頁）。
- * 9月21日（8・7）周防の大庭溪齋がシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』130頁参照）。
- * 9月22日（8・8）ピエール・ルゴウがマーストリヒトからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 9月24日（8・10）門人三瀬周三がシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』93-95頁参照）。
- 9月日付不詳、富士山についての記述。
- ◇ 9月25日（8・11）長崎奉行岡部駿河守より9月20日付シーボルト書簡にある対馬に関する申し立てを、老中へ報告する（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編 134-140頁参照）。
- * 10月2日（8・18）門人三瀬周三が鳴滝からシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』95-96頁）。
- * 10月8日（8・24）ロッテルダムの船主・貿易商 A.ファン・ホボーケンがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月10日（8・26）門人三瀬周三がシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』96-97頁）。

- 10月12日（8・28）イギリス人園芸学者ロバート・フォーチュン（Robert Fortune）が長崎に到着。滞在中に鳴滝の別荘を訪ねる。
- *10月20日（9・7）オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇幕府において外交問題につきシーボルト招聘の議起こる。
- *10月24日（9・11）門人三瀬周三がシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』97-99頁参照）。
- *10月31日（9・18）通詞植林栄左衛門がシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』82-83頁参照）。
- 11月2日（9・20）通詞会所の「長崎奉行支配組頭宛書簡の受領」についてメモする。
- *11月8日（9・26）上海駐在オランダ領事 T・クルースが上海からシーボルト宛に書簡を送る。
- *11月11日（9・29）門人三瀬周三がシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』99頁）。
- 11月16日（10・4）長崎にて、ロッテルダムの船主・貿易商 A.ファン・ホボーケン親子商会宛の手紙を書く。
- 11月23日（10・11）小倉の一医師（氏名不詳）が『病症報告書』（「木南の妻の症例」）をシーボルトに提出。
- *11月24日（10・12）通詞植林栄左衛門がシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』73頁）。
- *11月25日（10・13）門人三瀬周三がシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』100-101頁）。
- *12月5日（10・23）ロシア海軍大佐カトナコフ（N. Katnahoff）が長崎から、およびオランダ副領事ファン・ポルスブック（de Graeff van Polsbroek）が江戸からシーボルト宛に書簡を送る。
- *12月13日（11・2）ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフ（Likhachoff）がシーボルト宛に書簡を送る。ファン・ポルスブルックが江戸からシーボルト宛に書簡を送る。
- *12月15日（11・4）オランダ副領事ファン・ポルスブルックが江戸からシーボルト宛に書簡を送る。

- ◇12月16日（11・5）ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフが中国から長崎に入港。
- ◇同日、幕府、老中安藤対馬守に外務担当を命ずる。
- ◇12月17日（11・6）箱館駐在のロシア領事ゴシケヴィチが長崎に到着。
- *同日、ロシア海軍大佐 N.カトナコフが長崎からシーボルト宛に書簡を送る。
- 12月18日（11・7）ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフが来訪。日本・蝦夷・サハリンの地図を見せる。
- ◇12月20日（11・9）ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフが長崎を出港し上海に向かう。
- *同日、ドイツの薬学者 C.L.マルクェルトがボンからシーボルト宛に書簡を送る。
- 12月24日（11・13）江戸幕府より長崎奉行を経て、しばらく日本滞在を命ぜらる。
- *12月26日（11・15）オランダ副領事代理 J.P.メットマンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- *12月28日（11・17）上海駐在オランダ領事 T・クルースが上海からシーボルト宛に書簡を送る。
- *12月29日（11・18）アドリアン商会（Adrian & Co.）が出島からシーボルト宛に請求書を送る。
- *12月日付不詳、アドリアン商会および出島オランダ印刷所活版印刷技師 G.インデルマウルが長崎からシーボルト宛に領収書を送る。
- *月不詳19日、ハチノシン（A. K. Hatsinozin）が出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- *月日不詳、お稲がシーボルト宛に書簡（注：4通あり）を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』68-71頁参照）。
- 小冊子『王立シーボルト日本博物館ガイドブック』（蘭文）ハーグにて出版。
- 『1860年、ライデン市（オランダ）にあるフォン・シーボルト商会の施設で栽培された日本植物の目録と市価』7頁発行。
- ◇パリ所在、東洋およびアメリカ民族協会名誉会員。

1861年（文久元年） 65歳

- 1月1日（1860・11・21）門人・知人らがシーボルト宅訪れる。通詞植林栄左衛門の病気見舞い。カタクリの根から作られた澱粉の標本を入手。同日、長崎奉行（岡部駿河守）、長崎奉行支配組頭（依田克之丞）、幕府目付（都築金三郎）に宛て日記帳各1冊と手紙を添えて送る。

- 1月2日（ ♫ 11・22）滞在延長を江戸幕府が望む、という件の長崎奉行（岡部駿河守）からの手紙に受諾の返事を書く。長崎奉行支配組頭に茂木湾、ならびに長崎に通じる街道の防備強化について知らせる。ロシア領事ゴシケヴィチ（Iosif Antonovich Goshkevich）とロシアのフレガット艦スヴェトラナ号の艦長ブタコフ（Butakoff）を訪問。プロシア参事官ルドルフ・リンダウ（Ludolf Lindau）が来訪。
- *同日、オランダ副領事ファン・ポルスブルック（van Polsbroek）が神奈川からシーボルト宛に書簡を送る。
- 1月3日（ ♫ 11・23）七面寺の参詣日、および鳴滝の別荘と地代などの記述。
- *同日、オランダ副領事ファン・ポルスブルックが神奈川から書簡を送る。
- 1月4日（ ♫ 11・24）平戸出身の仏教僧侶の両眼を手術。町年寄後藤惣左衛門を訪ねて、梅毒の手術を施す。
- 1月5日（ ♫ 11・25）通詞植林栄左衛門の危篤について、シーボルト宛に書簡が届く。同日、栄左衛門死去（享年31歳）。ライデンに送る植物の荷造り。アメリカ使節団の医師スミス（Dr. Smith）博士来訪。日本人の門人たちにフランス語の教授。
- 1月6日（ ♫ 11・26）長崎奉行、奉行支配組頭、幕府目付と会見。今後の日本滞在について協議し、滞在は暫定的に2年とすることが決められる。
- 1月7日（ ♫ 11・27）ライデンに送る植物を入れた4つの箱を上海に送る。
- *同日、オランダ内務大臣（ファン・ヘームストラ van Heemstra）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- 1月8日（ ♫ 11・28）出島オランダ通商会社の印刷所技師インデルマウル（G. Indermaur）に、[印刷代として] 1分銀100枚のうち、40枚を即金で支払う。
- 1月9日（ ♫ 11・29）町年寄後藤惣左衛門を訪問。ロシア艦内に4箱の植物を運ぶ。
- *同日、オランダ副領事代理メットマン（J. P. Metman）が出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 1月10日（ ♫ 11・30）後藤惣左衛門の弟からの贈物、佐賀の鯉の粕漬が一桶受け取る。
- *同日、上海駐在オランダ領事クルース（T. Kroes）が上海からシーボルト宛に書簡を送る。
- 1月11日（ ♫ 12・1）長崎奉行、奉行支配組頭、幕府目付から日記帳に対する返礼の品々を受け取る。支配調役と俸給について話し合う。

木南内政病状

木南氏内政年四十八歳性倭
 韻敏未嘗一子と云せり三四
 年前偶老の乳痛の下病
 一小腺球カク覺ゆたす其の
 重き痛の情を痛きと
 可化を放過してをく
 依く若大く怪明
 外面をなく内影を播
 脈を動せり其の
 心平手平の如く
 乳を房重き
 振り意恩の
 如く
 腫も
 痛も
 自
 白
 何
 何
 少
 又
 子
 初

(後略)

<p>Duiker te de een afteken. Hiertoe doelt men wij dat de oorzaak van het leed, maar wouten, wij geen aanmerkelijke oorzaak. Het leed alleen van wegeer sine lastachtige kuisma, derzette, waarvan de toevallen te spling en te gevoelbaar is, volgt na te twee maanden voorsprijende onregelmatige maandelanden. de ondelijge geheel te stoppen, terwijl de toevallen maandelijks tel g'daante bestaan te zijn keeren. Een van de toevallen is dat latten. Bij de eerste vier vijf maanden zijn de maandelijke veranderingen regelmatig, de selter subdant onregelmatig, worden, ten gelid verstoppen, en weder te toevallen te waarschijn, verprijde ook te wegeer. Dit is de eerste twee jaren gelid, welke jaarlijks een twee geveliden. Over de twee jaar geveliden te in den hant, en de maandelijke veranderingen tel litten regelmatig. Metten wij, wie of duiker te oorzaak zij, moeten wij al litten te verstoppen te litten, omdat het anders, voor de maandelijke veranderingen niet geveer de zijn. Dit alleen voor de litten maandel voor litten geveer is het de geveer gelid van litten, dat geveer, om een geveer litten litten, wij te litten maandelijken.</p>	<p>It verstat der ziekte, die litten te maande van litten te.</p> <p>(van 11 10 maande van litten te o litten te)</p> <p>- Schrijver van litten te litten</p> <p>Notulen der litten litten litten litten.</p> <p>litten litten van 11 10 maande litten litten.</p>
--	--

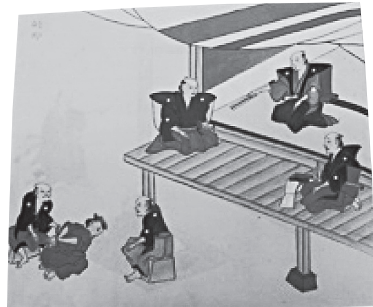
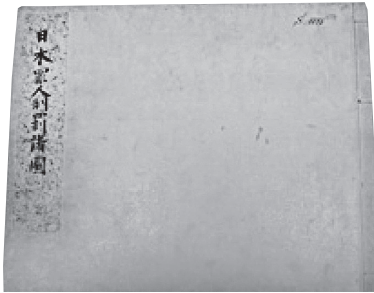
〔図80〕(上)「木南の妻の症例」と(下)「三瀬周三の蘭訳文」
(ボフム大学図書館所蔵 No : 1.266.000)

*同日，妻へレーネ宛の手紙を書く。オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボード
ウインが出島からシーボルト宛に書簡と領収書を送る。

○1月12日（ヰ 12・2）小倉の一医師による診療記録「木南の妻の症例」を，門人
三瀬周三が蘭訳してシーボルトに提出。

- * 同日、オランダ領東インド総督 (C.F.パユウ) とオランダ通商会社々長および第二次オランダ海軍派遣隊隊長カッテンディケの経理部三等士官ウムブグローヴェ (J. Umbgrove) 宛の手紙を書く。
- 1月13日 (♫ 12・3) オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウインを食事の際に、町年寄後藤惣左衛門に紹介。
- 1月14日 (♫ 12・4) 門松についての記述。
- 1月15日 (♫ 12・5) 七草についての記述。
- ◇ 同日、アメリカ公使館通訳ヘンリー・ヒュースケン (Henry Heusken) 暗殺さる。
- 1月16日 (♫ 12・6) 音頭についての記述。
- 1月17日 (♫ 12・7) 独特の泳法「立ち泳ぎ」についての記述。
- 1月18日 (♫ 12・8) 馬の餌、穀物への施肥についての記述。
- 1月19日 (♫ 12・9) カラスウリの根茎から作られる澱粉についての記述。
- * 同日、ライデンの王立民族学陳列館館長 C.レーマンスがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
- 1月20日 (♫ 12・10) 昆布の商人および昆布についての記述。
- 1月21日 (♫ 12・11) マムシおよびその薬用についての記述。
- * 同日、ロッテルダムの船主・貿易商 A.ホボーケンがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- 1月23日 (♫ 12・13) 貿易についての記述。
- ◇ 1月24日 (♫ 12・14) 幕府がプロシア全権公使オイレンブルグ伯爵と日普修好通商条約を調印。
- 1月25日 (♫ 12・15) オランダ領東インド政庁から出島の印刷事業の創設と維持のために、前貸金1,000グルデンを受け取る。これによって、前年7月25日4,000グルデン、同8月27日3,000グルデン、合計8,000グルデンを受領する。
- 1月27日 (♫ 12・17) 東部シベリア提督ムラヴィエフ (Muriaweff) とロシア海軍極東遠征隊司令官の副官・軍艦ボサドニーク艦長ビリリョフ (Birilef) が来訪。カチカラスについての記述。
- * 同日、ウィーンの Ch.ヒューゲル男爵がブリュッセルからシーボルト宛に書簡を送る。

- 1月28日（ ♫ 12・18）生きた植物10箱を、上海駐在のオランダ領事T・クルース宛に送る。財務管理官リボンが来訪。
- 1月29日（ ♫ 12・19）茶についての記述。
- 1月30日（ ♫ 12・20）椎茸についての記述。
- 1月31日（ ♫ 12・21）ファン・デル・カペレン（van der Capellen）海峡についての記述。
- 2月1日（ ♫ 12・22）イノンドについての記述。
- 2月2日（ ♫ 12・23）シイなどの植物についての記述。
- * 同日、長崎からオランダ通商会社駐日筆頭代理人A.J.ボードウィン宛に支払証明書（支払額1分銀140枚記載）を送る。
- 2月6日（ ♫ 12・27）長崎代官の士官（手代か?）で、画家のナイトウセイノシン来訪。踏絵と刑罰の絵を購入。



【図81】画家ナイトウセイノシン筆：水彩画「日本罪人刑罰諸図」
（ミュンヘン国立民族学博物館所蔵）

- * 同日、ウィーンのCh.ヒューゲル男爵がブリュッセルからシーボルト宛に書簡を送る。
- 2月7日（ ♫ 12・28）一晩中激しい風。気象観測についての記述。
- ◇ 2月8日（ ♫ 12・29）ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフが長崎に到着。
- * 同日、ヘルマン・トロイザイン（Hermann Treusein）が香港からシーボルト宛に書簡を送る。門人三瀬周三が鳴滝からシーボルト宛（町年寄後藤惣左衛門の病状悪化など）の書簡を送る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』10頁参照）。

- * 2月10日 (1861・1・1) ウィーン Ch.ヒューゲル男爵がブリュッセルからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月11日 (1・2) フランス代理公使ドゥ・ベルクール (Duchesne de Bellcourt) が横浜からシーボルト宛に書簡を送る。ウィーンの Ch.ヒューゲル男爵がブリュッセルからシーボルト宛に書簡を送る。
- 2月12日 (1・3) ヤمامミズ, アサガオと洗い粉についての記述。
- 2月13日 (1・4) 京都からクワイの球根がくる。植物についての記述。
- ◇ 同日, ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフ, 箱館駐在ロシア領事ゴシケヴィッチに会う。また, ポサードニク号艦長ビリリョフに, 箱館を経て対馬に向かうべし, と密命を下す。
- 2月14日 (1・5) カモについての記述。
- ◇ 同日, ロシア軍艦ポサードニク号, 箱館駐在領事ゴシケヴィッチを乗せて長崎を出発, 箱館に向かう。
- 2月15日 (1・6) 昆虫観察の記述。
- 2月16日 (1・7) カラスウリの根茎から採れる澱粉についての記述。
- * 同日, オランダ領東インド総督府のハールマン (Hallmann) がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。
- 2月17日 (1・8) プロシア遠征艦隊が江戸から長崎に入港。
- 2月18日 (1・9) 息子アレクサンダーに日本の地図を持たせて, ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフを訪問させる。プロシア遠征艦隊の自然科学者ドクトル・マルテンス (Dr. Martens) が来訪。
- 2月19日 (1・10) プロシア遠征艦隊の医師ヴェンツェル博士 (Dr. Wenzel) と参事官ヴェルナー (R. Werner) が来訪, 次いで徳島藩医関寛斎が佐倉藩医佐藤尚中と蘭方医司馬凌海の2人と共に来訪。
- 2月20日 (1・11) 2匹のアナグマを購入。カミキリムシの幼虫観察などの記述。
- 2月21日 (1・12) 夏の畑仕事をする人の足の腫れについて。
- 2月22日 (1・13) 午前中, オランダ副領事代理 J.P.メットマンと会談。その後, プロシア国使節として来日のオイレンブルグ伯爵を訪問。ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフと会見, 幕府から江戸に招待されたことを告げる。

- 2月23日（1・14）ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフとプロシア全権公使オイレンブルグ伯爵を訪問。帰途、伯爵、鳴滝の別荘まで同行。シーボルトの案内で町年寄後藤惣左衛門宅を訪ねる。ヒキガエルの観察記述。
- 2月24日（1・15）プロシア遠征艦隊出港、上海を経てシャムへ向かう。同日、シーボルト、イギリス船イングランド号で江戸出発予定が、同船のボイラー爆発事故により延期となる。ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフが長崎奉行岡部駿河守を訪問。その後、シーボルトに会う。シーボルト、ロシア陸軍少佐ヒトロヴォ夫妻を訪問。
- 2月25日（1・16）浦上川の川辺でヒマワリを購入。春の植物についての記述。
- 2月26日（1・17）温床についての簡単な記述。同日、ムラヴィエフ宛の手紙を書く。
- 2月27日（1・18）ツグミの種類、アナグマなどの簡単な記述。
- 2月28日（1・19）長崎奉行（岡部駿河守）と江戸におけるアメリカ公使館通訳ヒュースケン暗殺事件、および幕府顧問として江戸に向けての出発に関して会談（できるだけ早く船で神奈川へ回航することを求められる）。
- 3月1日（1・20）生きた植物3箱を上海に送る。オランダ総領事デ・ウィットを訪問。江戸への招待状を受け取る。ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフを訪問。長崎奉行（岡部駿河守）、リハチョフにシーボルトをロシア軍艦で横浜まで送り届けることを要請。同日、オランダ通商会社支社長宛の公式書簡を書く。
- 3月2日（1・21）さまざまな物資を注文。
- 3月3日（1・22）ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフ、鳴滝別荘のシーボルトを訪問。シーボルト、幕府の招待状をリハチョフに見せる。
- 同日、出島にて、長崎奉行（岡部駿河守）宛に手紙を書き、2月28日に論じられた数多くの主題に関する政治的な性格の文書を提出する。
- 3月4日（1・23）買ってほしいと持ち込まれたカワウソの毛皮の観察。カワウソとクマについての簡単な記述。
- 3月5日（1・24）日本の政治形態についての記述。同日、長崎にて、オランダ貿易会社支社長宛の手紙を書く。
- 3月6日（1・25）オランダ通商会社との契約が切れ、無収入となる。このため、幕府の申出を自由に受諾できる立場となる。唐菜・遅菜などについての記述。

* 同日、オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフがシーボルト宛に書簡を送る。

○ 3月7日（1・26）～9日（1・28～1・30）日本の刑罰・斬首、江戸の刑吏浅右衛門などの詳細な記述。

* 3月9日（1・28）長崎奉行支配組頭永持享次郎、同支配組頭兼勘定役中台信太郎が長崎からシーボルト宛に書簡を送る。

○ 3月10日（1・29）フェートン（Phaeton）号事件についての詳細な記述。

○ 3月11日（2・1）ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフがシーボルトを訪問し、ロシア軍艦の利用要請を断る。

○ 3月12日（2・2）注目すべき自殺（高野長英の自殺）について、門人二宮敬作から聞く。その詳細な記述。

◇ 3月13日（2・3）ロシア軍艦ボサードニク（Passadnick）号が対馬の尾崎浦に停泊（対馬事件の始まり）。

○ 3月14日（2・4）カタクリから採れる澱粉についての簡単な記述。この日、娘イネ宛の手紙を書く（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』16-17頁参照）。

○ 3月16日（2・6）アオサギについての簡単な記述。

○ 3月17日（2・7）蝦夷シカについての記述。

○ 3月18日（2・8）長門地方の石炭層についての記述。

○ 3月20日（2・10）町年寄後藤惣左衛門から二つのプシュカンを貰う。プシュカンの観察記述。この日、鳴滝の別荘からライデンの王立民族学陳列館館長（C.レーマンス博士）宛の手紙を書く。

○ 3月22日（2・12）狩猟についての記述。

○ 3月23日（2・13）シカについての記述。

○ 3月24日（2・14）鳴滝別荘の庭園に咲くさまざまな植物観察の記述。

○ 3月26日（2・16）ウグイスについての記述。

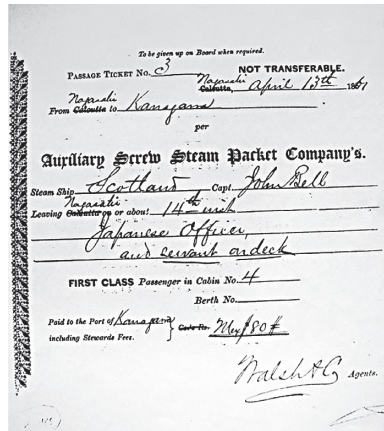
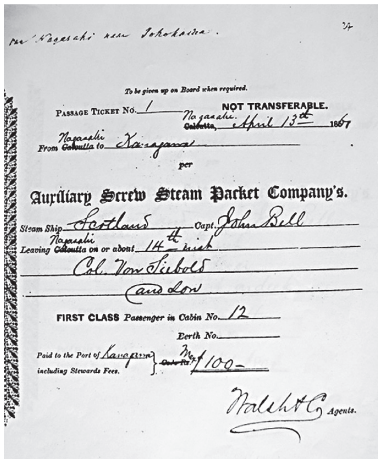
* 同日、マッセン（E. Massen）がバリからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 3月27日（2・17）農耕についての記述。

○ 3月28日（2・18）大島、桜島、硫黄島などの簡単な記述。

○ 3月29日（2・19）サボテン、バショウなどの簡単な記述。

- 3月30日（2・20）オランダ通商会社駐日筆頭代理人A.J.ボードウィン宛の手紙とオランダ領東インド総督（C. F.パヒユド）宛に家族および江戸への旅行に関する手紙を書く。
 - 3月31日（2・21）鳴滝村に住むカジユウという日本人の記述。
 - 3月日付不詳，出島にて，長崎奉行支配組頭宛の手紙を書く。
 - 4月1日（2・22）～2日（2・23）胸に乳頭四つを持つ男の医学的記述。
 - 4月3日（2・24）遣欧使節のこと，サクラやモモの花などの簡単な記述。
 - 4月4日（2・25）サクラ，スモモ，モウソウチク，筍などについての記述。
 - 4月5日（2・26）～8日（2・29）御大老井伊掃部頭の暗殺に関する記述など。
 - 4月9日（2・30）新種マンサクの植物学的記述。
 - * 4月10日（3・1）ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフからシーボルト宛書簡を送る。
 - 4月12日（3・3）漆器についての記述。
- 〈長崎から横浜へ〉
- 4月13日（3・4）長崎から江戸に向かう乗船チケットを購入。



〔図82〕長崎から横浜への乗船券（フォン・ブランデンシュタイン家所蔵）

- 4月14日（3・5）シーボルト、息子アレクサンダー、門人三瀬周三、召使伊三郎、新太郎らとイギリス汽船スコットランド（Scotland）号で長崎から出発。（乗船券：シーボルト父子ファーストクラス12号船室100メキシコ・ドル、日本人士官（門人三瀬周三）・召使（伊三郎と新太郎）3名ファーストクラス4号船室80メキシコ・ドル）。長崎奉行岡部駿河守長常より神奈川奉行松平石見守康直、滝川播磨守具知宛の「シーボルト江戸召出しの信任状」をオランダ通詞矢島安之丞に相渡し、矢島からオランダ通商会社筆頭代理人A.J.ボードウィンを介してシーボルトに手渡す（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編 140-141頁参照）。
- 4月15日（3・6）悪天候のため、ファン・ディーメン海峡を昼より前に通過できず。強風で船が大きく揺れる。
- 4月16日（3・7）チカコッフ岬と鹿児島湾への入口東側の岬を一日中航行する。
*同日、オランダ領東インド総督（C.F.パユウ）がバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月17日（3・8）嵐の船中。
- 4月18日（3・9）遠州灘を通過。御前崎へ。
- 4月19日（3・10）早朝、御前崎から石廊崎へ。相模湾に入り浦賀を見る。夕方、横浜港に到着。
- 4月20日（3・11）神奈川奉行（松平石見守康直、滝川播磨守具知）宛の長崎奉行（岡部駿河守長常）からの信任状を、通詞末永猷太郎を介して運上所の役人に手渡して上陸。オランダ副領事（ポルスブルック）のところ（住居「長延寺」：現在の京浜急行「神奈川新町」下車、すぐ横隣の「神奈川通東公園」の地）へ行く。
- 同日、ヨコハマ・ホテル（1860年オランダ人ホフナーゲル（C. J. Huffnagle）開業：現在の横浜市中区山下町。フレンチレストラン&洋菓子店：横浜「かをり」の地）へ。



〔図83〕 オランダ領事館跡

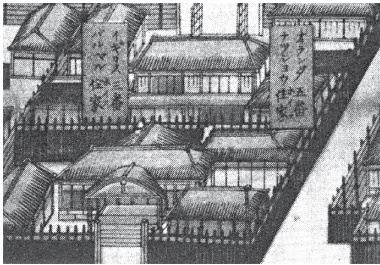


〔図84〕 オランダ副領事ポルスブルック

（開国150周年記念資料集『江戸の外国公使館』より）

〈ヨコハマ・ホテル滞在〉

- 4月21日（3・12）神奈川奉行松平石見守康直から、前任の神奈川奉行支配組頭の役宅が用意されたことを知らされる。通詞中山作三郎と共に神奈川へ散策。



〔図85〕 左側「ヨコハマ・ホテル」（『御開港横浜大絵図二編，外国人住宅図』部分図，五雲亭貞秀筆「オランダ五番ナッシュヨウ住家」居留地70番）。右側，現在はレストラン・洋菓子店「横浜かをり」の地。

- * 4月22日（3・13）ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフが上海からシーボルト宛に書簡を送る。アレクサンダーが母親宛に、4月20日付の手紙で、横浜到着のことなどを知らせる。

- 4月23日（3・14）神奈川奉行松平石見守康直と横浜運上所の執務室で最初の会見をする。同席者は幕府目付松平次郎兵衛と4人の高官（組頭），その他の役人（通詞中山作三郎ほか2人の通詞を含む）。
- 同日，草稿『神奈川奉行との謁見に関する記録の抜粋』（蘭文）を執筆。



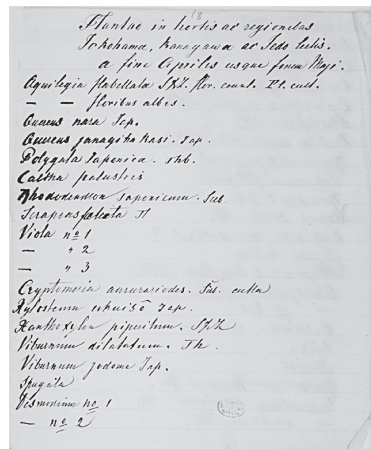
〔図86〕 神奈川奉行松平石見守康直とフランス代理公使ドゥ・ベルクール
（写真集『甦る幕末』朝日新聞社 1986年より）

- 4月24日（3・15）神奈川奉行（松平石見守康直）の邸宅のある丘へ遠出。植物の観察調査をする。オランダ人M.ドーマン（のち横浜居留地取締官）来訪。
- 4月25日（3・16）外人墓地とそれに隣接している丘へ遠出。植物の観察調査。横浜居留地のオランダ人ジーブルグ（N. C. Sieburgh）からオランダ商人が日本におけるオランダ貿易会社の設立を承認しないことなどを聞く。
- 4月26日（3・17）競売所に行く。江戸愛宕下に旧門人石井宗謙が居住と記す。
- 4月27日（3・18）神奈川奉行（松平石見守康直）から横浜における居宅を指示される。フランス代理公使ドゥ・ベルクールを訪問。小判9枚で屋敷に引越す。
〈ヨコハマ・ホテルから前任の神奈川奉行支配組頭の役宅へ〉
- 4月28日（3・19）フランス代理公使ドゥ・ベルクールが来訪。オランダ副領事ファン・ポルスブルックと晚餐。横浜周辺の丘陵地や谷間の地質調査。
- 同日，横浜からオランダ植民大臣（コルネット・デ・フロート Cornets de Groot 男爵）宛に手紙を書き，幕府は自分に科学やその他の事情についての顧問として，日

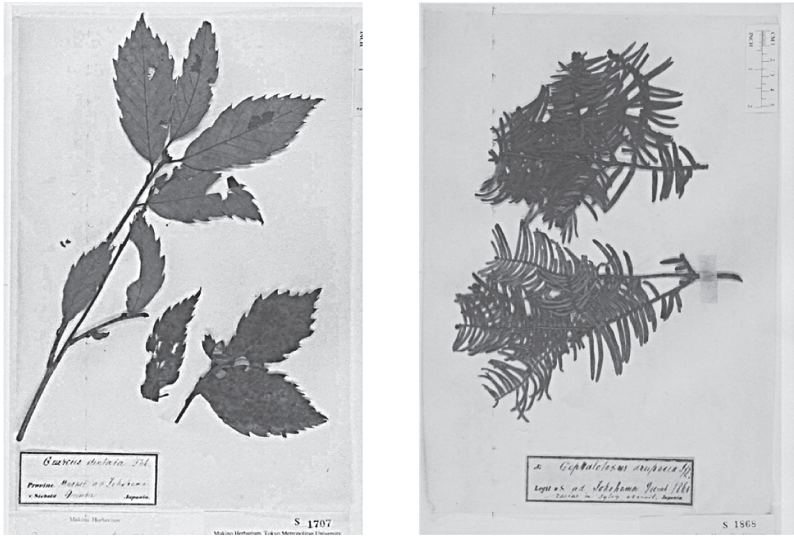
本にある程度の期間滞在することを要請したとし、さらに幕府は総領事にオランダ政府に事態を知らせてくれるように依頼したと、報告する。

- 4月29日（3・20）ある情報通の日本人と政治問題の話および大君の称号などについての記述。
- 4月30日（3・21）将軍の奥方、御門の妹についての記述。
- * 同日、出島オランダ印刷所活版印刷技師 G.インデルマウルが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 5月1日（3・22）気象観測器具の整理。二、三の植物を購入。土佐藩主、水戸藩主のこと、および御大老の暗殺、攘夷などについての記述。
- 5月2日（3・23）神奈川奉行（松平石見守康直）と会谈。江戸への出発についてと港規則、横浜港の新しい防波堤や岸壁の建設などについて相談を受ける。
- 5月3日（3・24）午前中、植物調査で遠出。午後、神奈川奉行（松平石見守康直）に呼ばれ、江戸の外国奉行所から受け取った書簡により、幕閣から江戸滞在はプロシア使節が滞在した赤羽根接遇所を用意することを決めたこと、またこの家計のために毎月10両（4グルデン）を受領することになったことなどを知らされる（注：前掲書のマクリーン著の訳文『シーボルトと日本の開国』1843-1866年79頁参照）。
- 5月4日（3・25）数人の外国奉行が来訪する旨、神奈川奉行（松平石見守康直）から知らせがあり、横浜の奉行所まで来るよう要請される。同日、横浜にて、植民大臣（コルネット・デ・グロート男爵）宛の手紙を書く。
- ◇ 5月4日（3・25）長崎製鉄所完成。
- 5月5日（3・26）ひとりの役人が来訪。運上所で外国奉行小栗豊後守忠順らに招かれる。同席者にもう一人の外国奉行、幕府目付、その他の役人など。遣米使節団についての簡単な記述。
- 5月6日（3・27）オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが家族とロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフからの書簡をもって来訪。外国奉行についての簡単な記述。
- 5月7日（3・28）散策中にある日本人医師（三浦麟之助か？）と知り合い、医師の家に案内される。

- 5月8日(3・29)競売,漆器を購入。フランス代理公使ドゥ・ベルクールと会う。
新任の神奈川奉行滝川播磨守具知を訪問。赤羽根の宿舎についての簡単な記述。
- ◇同日,長崎製鉄所一期工事の竣工を済ませ,H.ハルデス帰国。
- 5月9日(3・30)神奈川奉行(滝川播磨守具知)と会谈し,フランス皇帝とオランダ国王宛の將軍の書簡内容について話合う。フランス代理公使ドゥ・ベルクール来訪。オランダ商人のデ・コーニング(de Coningh)邸で夕食。
- 5月10日(4・1)フランス代理公使ドゥ・ベルクール宅で晩餐。1859年7月から1861年5月までの横浜での輸出入についての記述。
- 5月11日(4・2)長崎奉行(岡部駿河守)宛に横浜到着を知らせ,数種の種子を送る。貨幣制度についての記述。
- 5月12日(4・3)植物調査で遠出。荒木田土と屋根瓦などについての記述。
- 5月13日(4・4)二,三の非常に珍しい植物を購入。
- 5月14日(4・5)フランス宣教師(ジラル神父 Prudence Seraphin Barthélemy Girard)ら来訪。琉球諸島についての記述。
- *同日,フランス代理公使ドゥ・ベルクールが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 5月15日(4・6)老中水野和泉守忠精,遠藤但馬守胤統,堀出雲守之敏の3人が横浜に外国人居留地視察のため来る。
- 5月16日(4・7)神奈川奉行(滝川播磨守具知)ならびにフランス領事館(ドゥ・ベルクール)を訪問する。
- *同日,フランス代理公使ドゥ・ベルクールがシーボルト宛に書簡を送る。
- 5月17日(4・8)神奈川奉行(滝川播磨守具知)と会見。江戸への出発,將軍の書簡,フランス海軍の蒸気・帆船の積荷のこと,海兵の逮捕について話す。この日,ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフ宛の手紙を書く。
- 5月18日(4・9)森林の多い丘を散策。日本の鍛冶職人についての記述。



〔図87〕横浜・神奈川・江戸付近の庭の植物観察一覧(ボフム大学図書館所蔵)



〔図88〕 横浜近くの森で採集のコナラ（中央）と右側イヌガヤの標本（牧野標本館所蔵）

- *同日、パレソンス（J. R. Parsons）がシーボルト宛に書簡（タウンゼント・ハリスの記述など）を送る。
- 5月19日（4・10）早朝、神奈川へ遠出。オランダ副領事ファン・ポルスブルックの家で朝食。植物の観察と調査田圃の緑の肥やしについて記述。
 - 5月20日（4・11）カトリック教会設立（のちの横浜カトリック教会：正式名称 EGLISE DOSACRE-COEVR [聖心聖堂] 横浜天主堂）のために10ドル献金。日本のムクドリについて記述。
 - 5月21日（4・12）太田村の上手の森へ植物調査で遠出。横浜周辺の植生についての観察記述。
 - 5月22日（4・13）神奈川奉行支配組頭来訪。水先案内人を設けることなどについて相談。奉行宛に書面で設けることに反対を提案。オランダ商人デ・コーニングおよびN・C・ジープルグ、アメリカ公使館書記官A.L.C.ポルトマン来訪。夕方、横浜の大通りを抜け、港崎町や吉原まで散策。
 - 5月23日（4・14）植物調査で遠出。夕方、オランダ商人ライスとアメリカ商人シュルツェを訪問。

- 5月24日（4・15）横浜周辺に植えられているアブラナについての記述。
- 5月25日（4・16）森の中を動植物調査で遠出。日本のヒバリやキジについて記す。
- 5月26日（4・17）二人の外国奉行がシーボルト父子との面会で、27日を希望して特別に来る予定と記述する。
- 5月27日（4・18）横浜にて、江戸の外国奉行宛に江戸への召出しと今後の滞在に関して手紙を書く（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編144-146頁参照）。
- * 同日、デント商会代表者のイギリス商人エドアルド・クラークがシーボルト宛に書簡を送る。
- 5月28日（4・19）遣欧使節団に関連して、外国奉行竹内下野守保徳、桑山左衛門尉元柔らと横浜で会見。同席者に幕府目付、その他の役人など。幕府の招聘を受諾する。息子アレクサンダーも同席。
- 5月29日（4・20）要請された遣欧使節派遣案を書くことで多忙。フランス代理公使ドゥ・ベルクール来訪。日本の利益をめぐって重要な討議。この日、横浜外国奉行宛の手紙を書く。
- 5月30日（4・21）将軍についての記述。この日、外国奉行に手紙を送り、遣欧使節の派遣に際し注意すべき事柄を建白（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編146-148頁参照）。
- 5月31日（4・22）芳香のツツジについての記述。この日、日本の貨幣を両替できるように、神奈川奉行宛に手紙を書く。
- 6月1日（4・23）横浜周辺の植物観察。オオヤマレンゲについての記述。
- ◇ 同日イギリス公使オールコック（Rutherford Alcock）、オランダ総領事デ・ウィット（de Witt）と共に長崎を出発。
- 6月2日（4・24）フランス代理公使ドゥ・ベルクールが来訪。汽船ファイアリー・クロス（Fiery-cross）号が沖合の停泊地に来る。
- 6月3日（4・25）ノイバラについての記述。
- 6月4日（4・26）オオムギ、ビワ、ヒョウタンボクなどの簡単な記述。この日、横浜にて、遣欧使節の外国奉行（竹内下野守保徳、桑山左衛門尉元柔）宛に、汽船ファイアリー・クロス号に関する手紙を書く（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編149-150頁参照）。

- * 同日，出島オランダ印刷所活版印刷技師 G.インデルマウルが出島からシーボルト宛に書簡を送る。マオスラー？（Mausler）がシュトゥットガルトからシーボルト宛に書簡を送る。
- 6月5日（4・27）生活費として，幕府より毎月100両の手当てが贈られる旨，神奈川奉行（滝川播磨守：翻訳 K. B. Matabe）から1通の書簡を受け取る。フランス代理公使ドゥ・ベルクールと日本関係について重要な会談。
- * 同日，オランダ通商会社駐日筆頭代理人ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 6月6日（4・28）国家形態についての簡単な記述。同日，生活費に当てる手当ての支払いについて，神奈川奉行（滝川播磨守具知）宛の手紙を書く。また横浜から植民大臣（コルネット・デ・フロート男爵）宛に手紙を書き，5月2日に神奈川奉行から港規則，横浜港の新しい防波堤や岸壁の建設について相談を受けたと，報告する。
- 6月7日（4・29）生きた植物2箱をファイアリ・クロス（Fiery-cross）号に運ぶ。
- 6月8日（5・1）日本の瓦職人についての記述。オランダ植民大臣（ラオドン J. Loudon）宛に，日本における学術的・政治的活動についての手紙を書く。
- * 同日，オランダ人 N.C.ジープルグが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 6月9日（5・2）蒸気汽船レイエモーン（Lye [e] moon）号をデント商会から購入の件で，商会代表者のイギリス商人 E.クラークと話合う。同日，ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフ宛ての手紙を書く。
- 6月10日（5・3）遣欧外国奉行竹内下野守保徳・桑山左衛門尉元柔からの返書（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編150頁参照）。植民大臣（コルネット・デ・フロート男爵），海軍大臣，オランダ領東インド総督（C.F.パユウ），上海駐在オランダ領事 T.クルース，ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフ宛の手紙を書く。
- 6月11日（5・4）周辺の植物調査で散策。昆虫の好餌についての記述。
- 6月12日（5・5）5月の祝祭日についての記述。
- * 同日，オランダ人 N. C.ジープルグが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 6月13日（5・6）近郊へ調査のため遠出。前日の嵐で穀物畑に甚大な被害と記す。日本婦人の記述。

*同日、出島オランダ印刷所活版印刷技師 G.インデルマウルが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

○6月14日（5・7）前任の神奈川奉行（松平石見守康直）来訪。同日、長崎奉行岡部駿河守長常の5月7日付の書簡一通と、5月11日付のシーボルトの手紙への返書とを受け取る。

*同日、幕府要人（連名）が江戸からシーボルト宛に書簡を送る。

○6月15日（5・8）隅田川に架かる永代橋についての簡単な記述。

○6月16日（5・9）暇乞いの訪問。イギリス商人 E.クラークと日本使節団の借入れ汽船の用務について詳しく話し合う。

*同日、オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウインが印刷所への手紙を書く。

○6月17日（5・10）荷造りして、夕方、江戸へ向かう船に積み込む。神奈川奉行と別れの面会。

〈横浜から江戸へ〉

○6月18日（5・11）午前9時、江戸に向かう。午後6時過ぎ、赤羽根接遇所に着く。外国方支配調役吉川圭三郎以下の役人・通訳ら出迎え、次いで外国奉行首席の新見伊勢守正興来訪。

○6月19日（5・12）外国奉行主席新見伊勢守正興に宛て、昨日の歓迎のための来訪と饗応に対して書面で礼を述べる赤羽根で勤務する30人の士官と役人の名簿を受け取る。（注：前掲書『蘭文日記』の訳文530頁。ただし、前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編152頁では、6月20日付の記載で一日後になっている）。

◇同日、神奈川駐在のオランダ副領事ボルスブルックが外国奉行宛に、シーボルトの江戸への召出しの件について、通知なきことへの苦情の書簡を送る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編151-152頁参照）。

*同日、ライデンの王立民族学陳列館館長 C.レーマンス博士がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。

○6月20日（5・13）愛宕山神社へ散策。江戸の愛宕神社についての記述。

*同日、上海駐在オランダ領事 T.クルースが上海からシーボルト宛に書簡を送る。

オランダ人 N.C.ジープブルグが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。

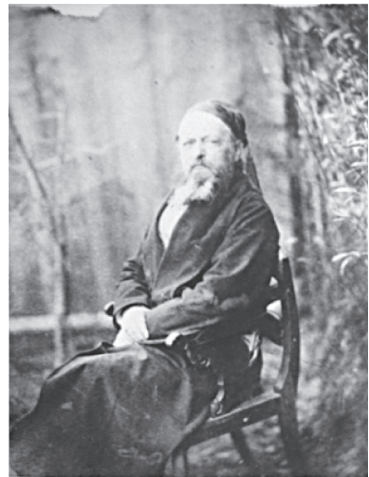
○6月21日（5・14）アサガオについての観察記述。

○6月22日（5・15）午前中、日本橋へ散策。江戸の奥方たちについての記述。

- 6月23日（5・16）静寂な一日を過ごす。
- 6月24日（5・17）花咲く植物観察。勤行の太鼓の音、髪の毛についての記述。
- 6月25日（5・18）午前中、江戸近郊の庭園へ遠出。イチイについての観察。
- ＊同日、長崎奉行から5月7日（6・14）付の書簡を受け取る。
- 6月26日（5・19）イヌガヤ、ヒガンザクラの観察。江戸の暗殺、処刑などの記述。
- 6月27日（5・20）外国奉行鳥居越前守忠善、津田近江守正路来訪し、日本の書生・医者・士官などに教授するよう依頼。アメリカ公使タウンゼント・ハリス（Thaunsend Harris）が来訪。ウズラ、キジについての記述。
- 6月28日（5・21）昨日要請された学生に対して教授を開講したり、医学を教えることが困難であることなどを、外国奉行宛に手紙を書く（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編154-155頁参照。ただし、この文献では一日後の記載となっている）。アメリカ公使ハリスを訪問。ナツツバキの観察。江戸の地震について記す。同日外国奉行竹内下野守保徳、水野筑後守忠徳がシーボルトの接待役となる。
- 6月29日（5・22）アメリカ公使館の善福寺境内の大イチョウを観察。光林寺にあるH.C.ヒュースケンと通訳伝吉の墓参り。



〔図89〕 アメリカ公使館にあてられた善福寺
（『F.ベアト幕末日本写真集』より）

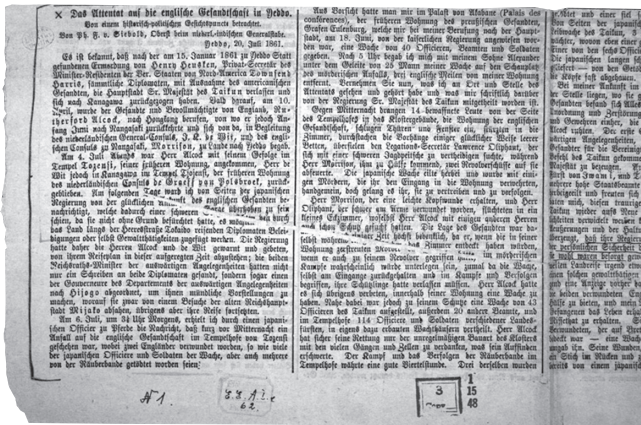


〔図90〕 アメリカ公使ハリス（開国150周年資料集『江戸の外国公使館』より）

- ◇同日、外国奉行水野筑後守忠徳、目付浅野一学氏祐が医学伝習、その他の世話役取締役となる（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編154頁参照）。
- 6月30日（5・23）門人石井宗謙死去の記述（享年65歳）。
- 7月1日（5・24）愛宕山へ散策。花市、菊の節句などについての記述。
- 7月2日（5・25）彗星の観察記述。
- 7月3日（5・26）外国奉行から江戸に召出して滞在させる書簡を受け取る。
- 7月4日（5・27）ハリスの書簡で、イギリス公使オールコックが江戸の東禅寺に、オランダ総領事J.K.デ・ウィットが神奈川に到着したことを知らせる。赤羽根接遇所にて、外国奉行宛の返書を書く。
- 7月5日（5・28）彗星の観察。東禅寺事件（江戸高輪東禅寺のイギリス仮公使館襲撃事件）。
- *同日、故郷からの書簡を受け取る。
- 7月6日（5・29）東禅寺事件の負傷者を治療。赤羽根接遇所は警備嚴重となる。外国奉行首席の新見伊勢守と前任の神奈川奉行（松平石見守康直）と会見。席上、7月10日午後1～2時に外国掛老中の役宅での会談に出席するよう招請の書簡を受け取る。アメリカ公使ハリスを訪問。オランダ総領事J. K.デ・ウィットとフランス公使ドゥ・ベルクール宛の手紙を書く。
- *同日、オランダ通商会社駐日筆頭代理人A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡と貸借対照表を送る。
- 7月7日（5・30）東禅寺に行きイギリス公使オールコックを訪問。フランス公使ドゥ・ベルクールにも会い、東禅寺事件に関する意見を聞く。外国奉行宛に手紙を書き、襲撃事件に関する意見や忠告を外国掛老中に提供できると希望を述べる。この日、オランダ人N.C.ジープルグからの書簡を受け取り、返書を書く。
- 7月8日（6・1）外国奉行が来訪し、特別手当を月々400両支給することを将軍が許可したことを知らせる。同日、昨日の手紙に対する外国奉行からの返書を受け取る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編159頁参照）。
- 7月9日（6・2）7人の医学者（大槻俊斎、大槻元俊、三宅良斎、戸塚静甫、高須松亭、池田多仲、野中元英）が公的に来訪（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編158-159頁参照）。彗星の観察。



〔図91〕東禅寺事件の図
 (『図説国民の歴史』1, 日本近代史研究会より)



〔図92〕「ケルン新聞」掲載の東禅寺事件
 (ボム大学図書館所蔵 No : 1.62.000)

○7月10日（6・3）80人の護衛に守られ、外国掛老中の役宅を訪れる。外国掛老中の首席久世大和守広周・次席安藤対馬守信正・若年寄酒井右京亮忠毗・外国奉行新見伊勢守正興・通訳の森山多吉郎らと会談。会談においては、遣欧使節一件の留意事項、長崎を主要貿易港に高めること、ロシア人（軍艦ボサードニク艦長ピリリヨフ）の対馬来航が話し合われる。

- 同日、江戸赤羽根から幕府老中宛の手紙（老中宛の条約文添付）を書く。ホオズキについての記述。
- *同日、オランダ領事デ・ウィットが横浜からシーボルト宛に、江戸滞在についての問合せの書簡を送る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編159-160頁参照）。
- *同日、オランダ人N.C.ジープルグが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月11日（6・4）江戸にて、オランダ植民大臣（コルネット・デ・フロート）、ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフ提督ほか、数多くの手紙を書く。信用取引についての記述。
- 7月12日（6・5）外国奉行鳥居越前守忠善、ついでイギリス公使オールコック来訪。この日、植民大臣（コルネット・デ・グロート男爵）、オランダ領インド総督C.F.パユウ（*注）、ヘレーネがオランダ通商会社役員プロス宛とロシア東洋艦隊司令長官リハチョフ宛の手紙を書く（*注：シーボルトはパユウと書いているが、この年スロート・ファン・デル・ベール Sloet van der Beele 男爵がオランダ領東インド総督に就任している。交代時期は不詳）。
- 7月13日（6・6）首席の外国奉行新見伊勢守正興、水野筑後守忠徳および目付浅野一学氏祐来訪。教授のこと、汽船借入れ、オランダ向け品物の輸送について話し合う。幕府外国奉行宛の手紙のとアメリカ公使館付書記官A.L.C.ポルトマン宛の手紙を書く。
- *同日、出島オランダ印刷所活版印刷技師G・インデルマウルが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月14日（6・7）気象観測。目付についての詳細な記述。
- 7月15日（6・8）外国奉行野々村丹後守兼寛来訪。2人の蕃書調所の舎密学の教官ならびに2人の医師をシーボルトに紹介。数個の珍奇な博物標本を贈られる。
- 7月16日（6・9）シーボルト東禅寺事件に関する論文作成のため、外国奉行に対して質問状（14カ条）を提出（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編161-163頁参照）。地震観測。気温、バロメーターの測定。江戸の地震についての記述。
- ◇同日、フランス公使ドゥ・ベルクールが横浜から江戸に来てフランス公使館の済海寺に入る。幕府に書簡を送り東禅寺事件の事後処理について意見を述べる。

- 7月17日（6・10）東禅寺事件に関するシーボルトの質問状に対し、外国奉行から回答書（東禅寺事件犯人捜査に関して）届く。採鉱学と冶金学の講義を開始。御使番、火災などについての詳細な記述。
- 7月18日（6・11）外国奉行新見伊勢守正興来訪。兵役についての簡単な記述。
- ◇同日、オランダ総領事デ・ウイトが横浜から外国奉行宛に、シーボルトの件について回答を促す書簡を送る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編163頁参照）。
- 7月19日（6・12）將軍侍医に仙台産の辰砂について講義。
- 7月20日（6・13）東禅寺事件に関する歴史的・政治学的論文が久世大和守広周と安藤対馬守信正の両老中へ提出。通詞（人物不詳）よりシーボルトの手紙に関する返書を受け取る（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』132頁参照）。江戸の人口についての記述。
- ◇同日、神奈川駐在のオランダ副領事ボルスブルックが外国奉行宛に、シーボルトの件について回答を促す書簡を送る（注：『シーボルト先生其生涯及功業』乙編163頁参照）。
- 7月21日（6・14）東禅寺事件に関してヨーロッパへ手紙を書く。真夜中ころ提出論文の声明書について若干の考慮すべき点をつけて、一通の手紙とともに戻る。
- 7月22日（6・15）20日付の植民大臣（コルネット・デ・フロート男爵）宛、上海駐在オランダ領事T.クルース宛の書簡など上海へ郵送するため、アレクサンダーがアメリカ公使館（善福寺）へ持参する。神奈川で浪人複数が捕えられたこと、またロシア人と対馬藩の家臣たちの間で小競合いがあった話などを聞く。
- ◇同日、外国奉行（久世大和守広周、安藤対馬守信正）がオランダ総領事デ・ウイト宛に、シーボルトの件について回答の書簡を送る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編164頁参照）。
- 7月23日（6・16）冶金学の講義続行。御用出役についての記述。
- *同日、イギリス商人E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月24日（6・17）フランス公使ドゥ・ベルクール公使から、彼とイギリス公使オールコック、アメリカ公使ハリスとの間の調停を依頼され、その目的でアメリカ公使館のハリスを訪ねたが無駄に終る。遊女についての簡単な記述。

- 7月25日（6・18）医者と自然科学者への講義。龍涎香とニガキ（苦木）について実験結果と報告書を受け取る。東禅寺襲撃事件に関するいくつかの情報と警告、および各公使などの関係を外国奉行宛に手紙を書き、協議と提案を行なう（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編164-165頁参照）。
- 7月26日（6・19）息子アレクサンダーが母親宛に書いた手紙で、東禅寺事件以後の様子を知らせる。別荘「浜御殿」を將軍の名において、現在の外国公使たちに提供する文書の写しを受け取る。ヨーロッパ産、アメリカ産の観賞用および有用植物の輸入についての記述。江戸赤羽根からイギリス商人E.クラーク、妻ヘレーネ、オランダ植民大臣（コルネット・デ・グロート男爵）宛の手紙を書く。
 - *同日、オランダ総領事J.K.デ・ウイトが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月27日（6・20）外国奉行津田近江守正路と会見し、諸大名に宛て出す將軍の布告案文の起草、遣欧使節などについて協議。赤羽根接遇所が強化され、新しい警護所が設置される。
- 7月28日（6・21）気分すぐれず。江戸近郊の庭園でユリ属の植物を探してもらうため、庭師を送る。馬の餌についての記述。布告案文の起草で多忙。同日、江戸・赤羽根接遇所にて、オランダ総領事J. K.デ・ウイト宛に植物購入についての手紙を書く。
- 7月29日（6・22）前日に続き、布告案文の起草で多忙。画家を雇い、カノコユリの美しい線を描かせる。
 - *同日、アメリカ公使館付書記官A.L.C.ポルトマンが江戸からシーボルト宛に書簡を送る。
- 7月30日（6・23）外国奉行小栗豊後守忠順が来訪し、日本の学者のこと、および將軍の別荘「浜御殿」をヨーロッパの公使たちに臨時に邸宅として提供することについての意見を求める。日本人医師来訪。喫煙やブドウ、江戸のコレラなどの記述。
- 7月31日（6・24）外国奉行に対し、東禅寺事件処理に関する意見書と事件防止のため、諸藩に出す布告案を提出（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編165-169頁参照）。妻ヘレーネからの手紙。
- ◇同日、阿波侯（松平阿波守）が藩医井上伸庵、同須田泰嶺の二人をシーボルトに就き医学の質問、修行をさせたく、外国奉行に相談の伺書を提出（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編170-171頁参照）。

- 草案『オランダ国王発幕府將軍宛警告書草案』（蘭文）を江戸赤羽根で執筆。
- 草稿『民俗文化の歴史的発展と現在の国家体制の発生と発達』（独文）を江戸で執筆。
- 草稿『神奈川奉行との謁見に関する記録抜粋』（蘭文）を執筆。
- 草稿『自然科学，医学に関する1861年報』（蘭文）執筆。
- 8月1日（6・25）ひとりの老中に対する暗殺計画の噂を聞く。直訴についての記述。
- 8月2日（6・26）外国掛老中二人から米・英・仏・蘭各国公使へ宛てた外国事務に関する通達があり，大君自身が別荘の浜御殿を当分の間の滞在場所に提供するとした。ムクドリやカラスなどの観察記述。
- 8月3日（6・27）学識ある自然科学者たちへ，抹香鯨から採れる龍涎香の興味深い報告について講義。ほぼ八日前から体調不良。
- 8月4日（6・28）召使新太郎が箱根山から戻り，そこで収集の植物や昆虫を持って来る。ひとりの浪人が請願者に変装し，嘆願書を手にして高官を襲撃したという噂を聞く。
- 8月5日（6・29）彗星の観察記述。
- 8月6日（7・1）冶金学の講義。老中松平豊前守信義の襲撃についての公式な通知を受け取る。老中松平豊前守への襲撃についての記述。
- *同日，オランダ人N.C.ジープブルグ宛の手紙を書く。
- *同日，デント商会代表者のイギリス商人E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 8月7日（7・2）マサキ，ミセバヤなどの葉についての記述。この日，イギリス商人E.クラーク宛の手紙を書く。
- 8月8日（7・3）外国奉行野々山丹後守兼寛来訪。昨年，薩摩藩邸に逃げこんだ30人の浪人が，この度水戸まで送還され禁錮され，尋問にあったが何も明白にならなかったことを知らせる。
- *同日，E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 8月9日（7・4）赤穂の銅や竜腦などの記述。同日，オランダ人N.C.ジープブルグ宛の手紙を書く。
- 8月10日（7・5）冶金学の講義。フランス公使ドゥ・ベルクールの秘書が来訪。琉球と日本の砂糖についての記述。この日，イギリス商人・デント商会代表E・クラーク宛の手紙を書く。

- * 同日、E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 8月11日（7・6）ひとりの外国奉行が来訪し、一水戸浪士が逃亡したことなどを知らせる。同日、江戸赤羽根からオランダ植民大臣（コルネット・デ・フロート男爵）宛に、7月5日～6日夜に起こったイギリス公使館襲撃事件について、長文の手紙を書き送る。
- 8月12日（7・7）箱根山に生えるススキについて簡単に記す。
- 同日、江戸赤羽根からオランダ総領事J.K.デ・ウイト宛に浜御殿に関する一通の手紙を書く。
- 8月13日（7・8）ノウゼンカズラについての簡単な記述。
- 同日、植民大臣（コルネット・デ・グロート男爵）、妻ヘレーネ宛の手紙を書く。
- 8月14日（7・9）7月、8月の気象観測についての記述。江戸にて、横浜のイギリス商人E.クラーク宛に速達を送る。
- * 同日、ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフからシーボルト宛に書簡（アレクサンダーの任官許可について）を送る。オランダ総領事J. K.デ・ウイト、E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 8月15日（7・10）遣欧使節団についての計画案を作ることで多忙。阿波侯の2人の医師須田泰嶺、井上仲庵を学生に加えるように紹介される。
- 同日、オランダ総領事J.K.デ・ウイトの横浜からの7月15日（6・8）付書簡を受け取る。そこにシーボルトが条約に反して勝手に江戸に滞在しているので、オランダの保護は要求できないということが書かれているのを知り、大いに傷つけられる（注：前掲書のマクリン著の訳文『シーボルトと日本の開国』1843-1866年88頁）。
- 同日、江戸赤羽根からオランダ植民大臣（コルネット・デ・グロート男爵）宛の手紙を書く。外国奉行宛に横浜周辺の風聞（イギリス船の江戸から横浜海路実測）を手紙で密告する（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編172頁参照）。
- ◇ 同日、イギリス公使オールコック（R. Alcock）が浜御殿を視察。
- 8月16日（7・11）息子アレクサンダーの誕生日を祝い、マガホニーの箱に入った2連発銃を贈る。午前2時ごろ、激しい地震。
- ◇ 同日、外国掛老中（久世大和守広周、安藤対馬守信正）がオランダ総領事デ・ウイト宛に、浜御殿移住に関すること、シーボルトの移住を含むことなどの書簡を送る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編172-173頁参照）。

- 8月17日（7・12）将軍侍医伊東玄朴と戸塚静海来訪（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編175-176頁参照）。地震の簡単な記述。
- 8月18日（7・13）夜中にアメリカ公使館のある善福寺で発砲事件起こる。赤羽根接遇所も武装される。誘導器について、ヒロセジコク（Hirose Dzikok）という江戸の道具製造職人のことなどの記述。
- 8月19日（7・14）日本の麻酔剤、レブラ、天然痘などについての記述。
- ◇ 同日、オランダ総領事ア・ウイトが老中宛に、8月16日付書簡の返書を送る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編173-174頁参照）。
- 8月20日（7・15）アメリカ公使タウンゼント・ハリスを訪問。門人たちが避雷針の使用書をヨーロッパから取り寄せてほしいと申出る。
- 8月21日（7・16）将軍の侍医戸塚静海、次いでフランス公使ドゥ・ベルクール、ビダリング博士ら来訪。
- 8月22日（7・17）江戸赤羽根接遇所から外国掛老中宛に、遣欧使節団に関する計画案を外国奉行を通して書面で提出し、その中で遣欧使節団をヨーロッパへ連れて行くには汽船を購入するのがよい、と考えていることを書く（注：前掲書所収、マククリーン論文の訳文『シーボルトと日本の開国』1843-1866年91頁参照および前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編蘭語文書・訳文236-264頁参照）。
- * 同日、幕府要人（久世大和守広周他の連名）が江戸からシーボルト宛に書簡を送る。
- 8月23日（7・18）オトコヨモギ、ニガキ、サルトリイバラなどの記述。同日、外国奉行に書簡を送り、病気のため休暇（横浜行き許可）を願い出る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編175頁参照）。
- * 同日、出島オランダ印刷所活版印刷技師 G.インデルマウルが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 8月24日（7・19）阿波の医師須田泰嶺の「飲み込んだ煙草の煙管」についての詳細な記述。
- * 同日、イギリス商人 E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 8月25日（7・20）カモメギク、ヤマギク、オトコヨモギなどについての記述。妻ヘレーネ、オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウイン宛の手紙を書く。夜中に体調を崩す。
- * 同日、イギリス商人 E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。

○ 8月26日（7・21）23日の書簡に対する外国奉行からの返書（横浜行き許可）届く（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編175頁参照）。門人須田泰嶺の注目すべき医学的事例，子宮外出産についての記述。

○ 8月（日付不詳）息子アレクサンダーを連れて，泉岳寺の赤穂義士46人の墓地を訪ねる。

〈江戸から横浜へ〉

○ 8月27日（7・22）船で江戸から横浜へ出発。午前6時から夕方の4時ごろまで海上にいる。品川の刑場で，やや距離をおいて20歳の娘が放火犯として火あぶりの刑に処せられるのを見る。富士山についての簡単な記述。

〈再びヨコハマ・ホテルに宿泊〉

○ 8月28日（7・23）オランダ総領事（J.K.デ・ウィット），フランス公使ドゥ・ベルクール公使，イギリス商人E.クラークを訪問。夕方，散歩。

○ 8月29日（7・24）早朝，植物調査で散策。二毛作のこと，森林および山地の植物などの記述。

*同日，イギリス商人E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。

○ 8月30日（7・25）ホテル内は少し不快。非常に蒸し暑い，と記す。

○ 8月31日（7・26）フランス領事ドゥ・ベルクール，陸軍大佐 v.d.ゴッホを訪問。

○ 9月1日（7・27）正午，イギリス商人E.クラーク氏宅へ。日本人の飲食についての記述。

○ 9月2日（7・28）古い門人，並びに幕府の要請により赤羽根において教授した学者の名簿などの詳細な記述。田舎の無邪気さについての記述。

○ 9月3日（7・29）森の中の涼しい農家を訪ねる。横浜近郊の田舎の昼食などについての記述。

*同日，幕府要人8名（久世大和守広周他の連名）が江戸からシーボルト宛に書簡を。

○ 9月4日（7・30）田地の売却値段と年貢についての記述。

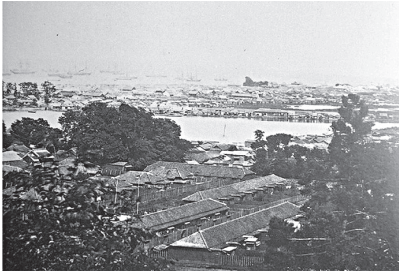
○ 9月5日（8・1）裕福な農家についての記述。

○ 9月7日（8・3）農村の近隣の住民について，農家などの記述。

○ 9月8日（8・4）輸出品「シュロ」の織物と記す。

○ 9月9日（8・5）横浜の外国人についての詳細な記述。

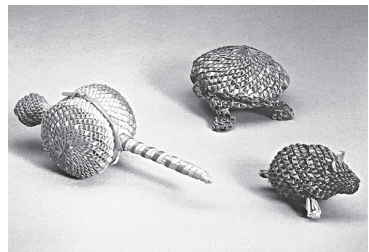
◇同日，オランダ領事館にて，オランダ領事，神奈川奉行，同所在勤目付らとシーボ



〔図93〕「野毛山から見た横浜」と「東海道の一風景」横浜～藤沢
（『F.ベアト幕末日本写真集』より）

ルトの身上について対談（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編176～177頁参照）。

- * 9月10日（8・6）門人三瀬周三がシーボルト宛に書簡を送る。
- 9月12日（8・8）～14日（8・10）森の中。虫の声を聞く。虫のコンサートと題した観察記録。
- * 同日、幕府要人8名（久世大和守広周他の連名）が江戸からシーボルト宛に書簡を送る。
- 9月14日（8・10）神奈川奉行所に江戸の外国奉行宛に一通の手紙を提出く9月18日横浜を発って江戸へ戻ることの通知（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編177～178頁参照）。
- 9月15日（8・11）シーボルトの門人で、フランス語を話す馬田ショウイチロウ（Bado Sjoitsiro）が長崎から横浜に来る。商人の神（恵比寿）についての簡単な記述。
- 9月16日（8・12）快適な旅について記す。
- 9月17日（8・13）麦わら細工と参府旅行について記す。



〔図94〕上側「麦わら細工：筆筒」と下側「麦わら細工：おもちゃ」（ミュンヘン国立民族学博物館所蔵）

〈横浜から再び江戸へ〉

- 9月18日（8・14）朝7時、横浜を出発し、江戸に向かう。東海道や月見の祭りについての記述。
- 9月19日（8・15）外国奉行宛に、江戸・赤羽根の宿舎に到着し、学生に教授することを知らせた手紙を提出（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編178頁参照）。
- * 同日、オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。イギリス商人 E.クラークがシーボルト宛に書簡と契約書を送る。
- 9月20日（8・16）アメリカ公使タウンゼント・ハリスを訪問。
- * 同日、イギリス商人 E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇ 同日、長崎港を見おろす小島郷の丘に、小島養生所を開設。ポンペが教鞭をとる。
- 9月21日（8・17）朝5時半ころ、かなり強い地震。
- ◇ 同日、外国掛老中（久世大和守広周、安藤対馬守信正）がオランダ総領事デ・ウィット宛に、シーボルトの身上についての書簡を送る（注：前掲書『シーボルト先生及功業』乙編178－179頁参照）。
- * 9月22日（8・18）外国奉行宛に、文書で蒸気帆船レイエーモーン（Leye[e]moon）号の石版画を送付。イギリス軍艦リングダブ（Ringdove）号で、妻ヘレーネ宛とオランダ通商会社筆頭代理人 A.J.ボードウィン宛の手紙、オランダ貿易会社の重役会宛に、蒸気帆船レイエーモーン号買入れの可能性について、早く返事をくれるように手紙を書く。
- 9月23日（8・19）赤羽根接遇所についての簡単な記述。外国奉行宛に、清国咸豊帝が7月17日に逝去した新聞を得た報ずる英字新聞訳と書簡を送る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編179－181頁参照）。外国奉行宛に蒸気帆船レイエーモーン購入を勧める手紙を書く（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編181－182頁参照）。
- * 同日、イギリス商人 E.クラークがシーボルト宛に書簡を送る。
- 9月24日（8・20）天台宗の浅草寺へ息子アレクサンダーを連れて遠出。江戸の浅草寺についての詳細な記述。
- 9月25日（8・21）採鉱学の講義。
- 9月26日（8・22）上海からの手形。青銅器についての簡単な記述。この日、妻へ

レーネ、オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィン、プロシア参事官 R. リンダウ、イギリス商人 E・クラーク、門人二宮敬作、ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフ宛の手紙を書く。

- 9月27日（8・23）津和野藩主亀井隠岐守の侍医池田多仲来訪。
- ◇同日、オランダ総領事デ・ウィットが外国掛老中宛に、シーボルトの身上について、シーボルトは個人的に出席しているの、オランダ政府は関知するところでない」と主張し、苦情を述べた書簡を送る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編182-183頁参照）。
- 9月28日（8・24）ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフ宛の手紙を書く。眼鏡職人の磁石と地震の予兆についての記述。
- 9月29日（8・25）夜11時、激しい地震。
- 9月30日（8・26）冶金学の講義。蕃書調所から10人の教官来訪。カラタチの垣根についての記述。
- *同日、幕府要人8名（久世大和守広周他の連名）で、シーボルト宛に書簡を送る。
- 10月1日（8・27）地震に関する簡単な記述。
- 10月2日（8・28）ハクウンボク、キリについての記述。赤羽根接遇所にて、アメリカ汽船セント・ルイス（St. Louis）号に関して、外国奉行宛およびオランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィン宛に手紙を書く（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編184-185頁参照）。
- *同日、上海駐在オランダ領事 T・クルース、上海からシーボルト宛に書簡を送る。またアメリカ人ジョン・ウイルソン（John Willson）が横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 10月3日（8・29）召使新太郎、料理人宛に俸給一分銀四枚を支払う。江戸城と家康、イギリス人アダムス、オランダ船リーフデ（Liefde）号のことなどの簡単な記述。
- 10月4日（9・1）江戸城墨壁の上のシラサギ、カラス、城の濠などスイレン、ハスなどの記述。
- *同日、幕府要人8名（久世大和守広周他の連名）が江戸からシーボルト宛に書簡を送る。
- 10月5日（9・2）奉行所役人の扮装についての記述。

- *同日、オランダ人N.C.ジークブルグが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 10月6日（9・3）植木園まで遠出。根菜類についての記述。
- 10月8日（9・5）江戸の外国奉行ならびに長崎奉行宛に、オランダ産植物5種を贈る手紙を書く。
- 10月9日（9・6）アメリカ公使タウンゼント・ハリスとイギリス商人E.クラーク来訪。
- 10月10日（9・7）画家に1分銀2枚支払う。料理人、伊三郎と周三に別離の前に3両払う。汽船レイエーモン号の属具目録を外国奉行宛の文書として作成。さらに遣欧使節に関する私案について想起してもらうようにする（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編190—193頁参照）。イギリス・フランス公使、オランダ総領事が外国掛老中と江戸において商議。その後アメリカ公使タウンゼント・ハリスを訪問し、別離の挨拶をする。
- ◇同日、外国掛老中安藤対馬守信正宅で、対馬守とオランダ総領事デ・ウイトがシーボルトの身分について対談〈対話書〉（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編185—189頁参照）。



〔図95〕老中安藤対馬守信正の肖像
（『図説国民の歴史』1日本近代史研究会より）

- *同日、外国奉行がシーボルト宛に、7月31日付の書簡の返書を送る（注：前掲書『シーボルト其生涯及功業』乙編189—190頁参照）。

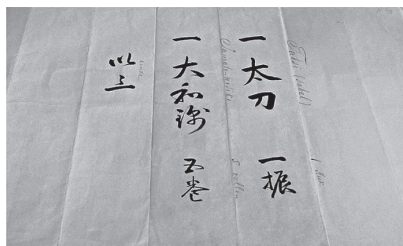
- ◇10月日不詳，外国掛老中がオランダ総領事宛に，9月27日付の書簡の返書を送る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編183-184頁参照）。
- ◇10月日不詳，軍艦奉行（井上信濃守，木村摂津守）が外国掛老中（安藤対馬守信正）宛に，シーボルト申立ての蒸気船に関して，見合わせの書状を提出（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編194頁参照）。
- 10月11日（9・8）ムクドリ，カラスなどの記述。
- *同日，ルドルフ・ルワング（Rudolf Luwang）が長崎からシーボルト宛に書簡を送る。
- 10月12日（9・9）カモについての記述。
- 10月13日（9・10）外国奉行水野筑後守忠徳来訪。幕府が江戸退去を要望している旨伝える（幕府外交顧問・学術教授の職を解任）。外国奉行との重要な会談。アレクサンダーがイギリス公使館通訳となる。
- 10月14日（9・11）冶金学・政治学・法律制定の講義を続行。イギリス商人E・クラークが来訪。フランス公使ドゥ・ベルクールから老中との会見について問い合わせ。気分悪し。
- 10月15日（9・12）コチニールについての記述。
- *同日，幕府要人5名（久世大和守広周他の連名）が江戸からシーボルト宛に書簡を送る。汽船レイエーモーン号購入に関するシーボルトの9月23日付ならびに10月10日付の書簡に対する返書を受け取る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編194-195頁参照）。外国奉行から10月17日（9月14日）と18日（9月15日）は神田明神祭で市中雑踏の懸念があるので，外出しないようにという2回目の書簡が届く（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編193-194頁参照）。
- 10月16日（9・13）10月8日（9・5）の書簡で，オランダ産の植物の種子5種贈呈に関する謝礼の返書が外国奉行から来る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編195頁参照）。カマキリ，ハリガネムシについての記述。
- *10月17日（9・14）長崎奉行高橋美作守和貫，出島オランダ印刷所活版印刷技師G.インデルマウル，同会社駐日筆頭代理人A.J.ボードウィンが長崎から，またイギリス商人E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 10月18日（9・15）冶金学の講義続行。冶金学におけるシーボルトの学生で，蕃書調所教官大嶋惣左衛門と市川齋宮から1通の書簡を受け取る。イギリス商人E.ク

ラークが横浜からシーボルト宛書簡を送る。

- 10月19日（9・16）法華宗、蓮華往生について、残酷な僧侶のまやかしという記述。貨幣についての簡単な記述。
- *同日、オランダ人N.C.ジグブルグ、横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 10月20日（9・17）茶店の狸茶屋まで散策。
- 10月21日（9・18）午前3時に強烈な地震と記す。
- 10月22日（9・19）蘭語処方箋を赤羽根接遇所にて書く。ウラジロウツギの葉と漁撈との関係の簡単な記述。
- *同日、前長崎海軍伝習所教官・のちオランダの海軍大臣カッテンディケがオランダのヘット・ローデン（het Lorden）からシーボルト宛に書簡を送る。
- 10月23日（9・20）召使新太郎が箱根から乾燥した植物や種子をもって戻る。
- 10月24日（9・21）ひとりの学生がシーボルトを訪ねて、蕃書調所では日本の法律や制度に政治的に言及することは、布告により禁止されたとのことを知らせる。江戸の蕃書調所についての簡単な記述。ヘレーネ宛の手紙を書く。
- 10月26日（9・28）草稿『添付書類 Lett.B.ロシア海軍少将イワン・フェドロヴィチ・リハチョフ（Ivan Fedrovich Likhachof）からシーボルト書簡の抜粋』（仏文）を執筆。
- *同日、ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフが上海～香港間の定期船アデン号の船上からシーボルト宛に書簡を送る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編 蘭語文書・訳文274-277頁参照）。フランス公使ドゥ・ベルクール、イギリス商人E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 10月27日（9・24）江戸赤羽根から外国奉行宛に、一通の手紙を書く（オランダ駐日総領事または公使就任を自薦する）（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編195-196頁参照）。同じく、オランダ内務省長官宛の手紙を書く。
- 10月28日（9・25）外国奉行新見伊勢守正興、新任の外国奉行竹本隼人正正明、根岸肥後守衛奮来訪。
- 10月29日（9・26）將軍侍医師戸塚静海来訪。
- 10月30日（9・27）赤シソとその赤い汁液についての記述。
- 10月31日（9・28）草稿『江戸の門人、高名な医師、学者に対する最後の挨拶』（蘭文）を江戸で執筆。

- *同日、プロシア全権公使オイレンブルグ伯爵がシーボルト宛に書簡を送る。
- 11月2日（9・30）幕府、シーボルトの雇傭を解く。外国奉行（新見伊勢守、水野筑後守、松平石見守、鳥居越前守、津田近江守、竹本隼人正、根岸肥前守）連名の手紙で、駐日オランダ政府代表として再渡を望んでいるといってくる（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編196-197頁参照）。
- 同日、外国奉行宛に、汽船レイエモン号購入の取り止めに速やかに発表するとともに、同船の石版図および付属書道具の目録返却を求める書簡を送る（注：『蘭文日記』11月2日の記事、および前掲書『シーボルト其生涯及功業』乙編197頁参照）。
- 11月3日（10・1）江戸赤羽根から幕府老中宛の手紙を書く。外国奉行宛の手紙で、江戸から退去するようになった理由を明らかにしてほしいと書く（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編197-198頁参照）。
- 11月4日（10・2）将軍侍医戸塚静海、アメリカ商人オーナー（H. Owner）らの来訪。将軍侍医桂川甫周が日光から採集の植物10種を持参し来訪。
- *同日、イギリス商人E.クラーク、横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 11月5日（10・3）イギリス商人E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。同日付「ケレン新聞」307号に、東禅寺事件に関する論文『歴史的的政治的観点より見たる江戸の英国公使館への暗殺計画』（独文）を掲載。
- 11月6日（10・4）新任の外国奉行来訪。10月27日（9・24）の返書を受け取る。
- *同日、外国奉行（新見伊勢守、水野筑後守、松平石見守、鳥居越前守、津田近江守、竹本隼人正、根岸肥前守）連名で、シーボルト宛に学術教授差し止め理由の書簡を送る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編198-199頁参照）。
- ◇11月7日（10・5）伊東貫斎、林洞海がシーボルトへの贈物（羊羹・煙草入れなど）を届出る。また戸塚静海は『本草図説』一部、10巻贈呈の届出る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編199頁参照）。
- 11月8日（10・6）外国奉行宛の手紙を書く（謝辞と老中への会見を乞い、種痘所・蕃書調所などを訪ねたいと申出る書簡）（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編 蘭語文書・訳文264-265頁参照）。夜7時から朝まで激しい嵐。気象観測の記述。
- 11月9日（10・7）将軍侍医桂川甫周・戸塚静海その他の門人由来訪。多くの植物乾燥標本などが贈られる。種痘所の所員から立派な植木鉢を貰う。

- 11月10日（10・8）11月2日と3日のシーボルトの書簡に対する外国奉行からの返書。外国掛老中との別れの面会が明朝9時に決定の通知（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編199-200頁参照）。真夜中あたりに、地震が長く続く。
- 11月11日（10・9）外国掛老中の邸宅で別れの宴。閣老全員が出席し友好的に歓待され、將軍から国家的な働きに対する褒美に印として名誉太刀と科学に関する講義に対して高価な錦繡五巻を賜わる。幕府はオランダ総領事J.K.デ・ウイットの抗議により、解雇するが再び帰還することを切望すると、シーボルトに述べる。



【図96】「將軍家茂より拝領の太刀と刀掛け」,「目録」
(ミュンヘン国立民族学博物館所蔵)

- 11月12日（10・10）横浜の大火事。
- *同日、イギリス商人E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- 11月13日（10・11）息子アレクサンダーが横浜に向かって出発。將軍侍医桂川甫周に父甫賢の追憶文を贈る。
- 11月14日（10・12）隅田川に架かる永代橋についての簡単な記述。
- 11月15日（10・13）四季折々の富士山について記す。この日、蕃書調所所長宛の公式書簡を書く（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』453頁参照）。同調所の杉山三八宛の手紙を書く（注：前掲書『シーボルト関係書翰集』21-22頁参照）。
- *同日、アメリカ公使タウンゼント・ハリスが江戸（ハリス邸の寺院：善福寺）からシーボルト宛に書簡を送る。
- 11月16日（10・14）学生たち（戸塚静海、伊東玄朴、桂川甫周、伊東貫斎など）がシーボルトとの別れのために訪れる。学生たちに器具、書物、医薬、筆記用具などを分配（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編203頁参照）し、また珍しい博物標本やその他の小さな贈物を貰う。アメリカ公使タウンゼント・ハリスへ

の訪問。

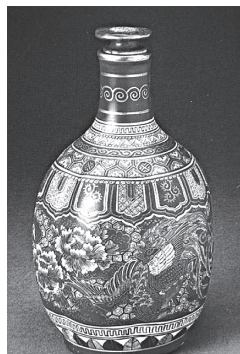
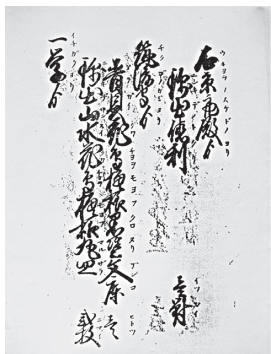
- *同日、アメリカ公使タウンゼント・ハリスが江戸からシーボルト宛に書簡を送る。
- 11月17日（10・15）江戸にて、ロシア海軍極東遠征隊司令官リハチョフ宛の手紙を書く。11月11日（10・9）に老中に宛てて個人的に出した提案の返書を受け取る。ライデン発送のキクについての記述。

〈江戸から横浜へ〉

- 11月18日（10・16）10時ころ、外国奉行水野筑後守忠徳が来訪し、幕府の名において特別に700両を贈ると述べる。シーボルト、外国掛老中久世大和守へ螺管銃一丁、安藤対馬守へ紋散並管銃一丁、若年寄酒井右京亮へ猪鹿銃一丁を贈るよう申出る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編202-203頁および蘭語文書・訳文 265-266頁、『蘭文日記』11月18日の記事参照）。江戸を退去して横浜に向かう。
- 11月19日（10・17）競売。若干の古い漆器具を購入。護衛兵に対する謝辞。長崎奉行高橋美作守和貫から、10月8日の書簡に対する返書を受け取る。
- ◇同日、オランダ政府がオランダ領東インド総督（スロート・ファン・デル・ベレー）に、シーボルトをジャワに召還することを要請する（注：前掲書所収のマクリー論文の訳文『シーボルトと日本の開国』1843-1866年90頁参照）。オランダ植民大臣ラウドン（James Loudon）が国王ウイレム三世にシーボルトの活動に対する疑念を表明。
- 11月20日（10・18）横浜運上所の有能な役人たちを介して、外国奉行宛に7・8・9月と10月16日までの俸給を支払って貰うよう要請（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編204頁参照）。神奈川奉行（松平石見守康直）と会見。E.クラークによる晚餐。
- 11月21日（10・19）フランス公使ドゥ・ベルクールとオランダ総領事J.K.デ・ウイットを訪問。イギリス海軍の東インド艦隊司令長官ホープ提督と会う。神奈川奉行所にて、竹本図書頭と対談（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編204-205頁参照）。
- 11月22日（10・20）イギリス公使オールコックを訪問。
- 11月23日（10・21）横浜にて、オランダ植民大臣（J.ラウドン）宛の公式書簡を送

る。その中で、新聞各紙に現れる悪評を回避するために、江戸出発に関する諸事実を官報で公表するように、大臣に要求すると書く（注：前掲書所収、マクリーン論文の訳文『シーボルトと日本の開国』1843-1866年93頁参照）。

- 同日、シマガニの観察記述。
- 11月25日（10・23）乾いた竹筒などの記述。
- 11月28日（10・26）ポルトガル領事でイギリス商人のE・クラーク邸での晩餐。
- 11月29日（10・27）ポルトガル領事でイギリス商人のE.クラークを通じて、イギリス公使オールコックが息子アレクサンダーをイギリス公使館の日本語通訳に所望していると知らされる。
- 11月30日（10・28）息子アレクサンダーのことでイギリス公使オールコックと話を
する。外国奉行宛に長崎へ旅するに際し、エンペラー（Empereur）号のような日本
汽船を利用してほしいと要請（『蘭文日記』11月30日の記事）。
- 12月1日（10・29）10月29日付で、外国奉行水野筑後守忠徳の書簡を受け取る
（シーボルトから餞別品を贈ったのを謝し答礼品を贈るという内容のもの）（注：
前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編205頁参照）。



〔図97〕「贈答品目録」（左側）（ブランデンシュタイン・ツツェペリン家所蔵）と外国奉行水野筑後守より文箱（中央）と御目付酒井右京亮より送られた錦出徳利（ミュンヘン国立民族学博物館所蔵）

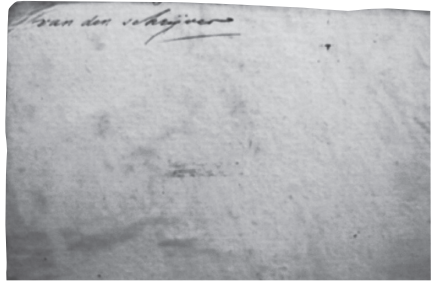
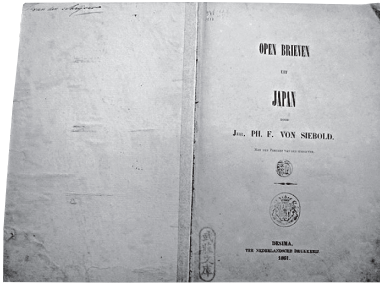
（*）答礼品目録〈贈答品目録〉には「老中久世大和守より松竹梅鶴亀蒔絵木皿一枚、山水蒔絵三ッ組杯一枚。老中安藤対馬守より松竹梅鷹蒔絵蒔絵木皿一枚、籐模様蒔絵三ッ組杯一枚。外国奉行水野筑後守より青貝花鳥模様黒塗文庫一つ、錦出山水花鳥模様丸皿一枚。御目付酒井右京亮より錦出徳利一對。幕府目付浅野一学より錦出山水模様隅切角皿一枚、藍出松竹梅模様丸蓋物一つ、霞鷹蒔絵黒塗盆一枚」とある（目録は現在ブランデンシュタイン・ツツェペリン家に所蔵されている。また、これらの贈答品はミュンヘン国立民族学博物館に現存する）。

- 12月3日（11・2）神奈川奉行（松平石見守康直）のところへ来るよう求められる。外国掛老中と外国奉行からの贈物を受け取る。門人三瀬周三が彼の大洲藩主加藤出羽守から江戸に喚問される。正午12時ごろ横浜で地震があったと記述。
- 12月4日（11・3）神奈川奉行（松平石見守康直）の招きで、門人三瀬周三を奉行に渡す。午前10時、息子アレクサンダーが運上所から奉行所に周三を連れて行く。
- 12月5日（11・4）息子アレクサンダーを連れて、イギリス公使オールコックを訪問。イギリス公使館の職員となり、俸給は年俸300ポンド・スターリングという約束ができる。同日、神奈川奉行所役人の若菜三男三郎・松村忠四郎・星野金吾ら連名で、シーボルト宛に書簡を送る。
- *12月6日（11・5）長崎奉行支配組頭中台信太郎が長崎からシーボルト宛に書簡を送る。
- *12月8日（11・7）オランダ王子ヘンドリックがヴルフェルディンゲン（Wulferdingen）からシーボルト宛に書簡を送る。
- 12月11日（11・10）旧友の伊藤圭介来訪（33年ぶりの再会）。
- 12月12日（11・11）イギリスの画家チャールズ・ワーグマン（Charles Wirgman）来訪。シーボルトの肖像を描く。イギリス公使による晩餐。
- 12月13日（11・12）アメリカ汽船セントルイス号でプロシア参事官リンドウ博士（Dr. Lindau）とロシアの植物学者マキシモヴィッチ（Maximovich）が箱館から来る。
- *同日、ロシア海軍極東遠征隊司令官イワン・フェドロヴィチ・リハチョフがシーボルト宛に書簡を送る。
- 12月14日（11・13）生きた植物と種子4箱を上海駐在のオランダ領事T・クルース宛に送る。
- 12月16日（11・15）11月30日の書簡について拒絶の返書が来る。息子アレクサンダーの召使新太郎を密かに江戸にいる門人三瀬周三のところへ送る。
- 12月17日（11・16）アムール河と間宮海峡での流氷などについて記す。気象についての簡単な記述。外国奉行からシーボルト宛に、長崎帰旅の件についての書簡を送る（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編207-208頁参照）。
- 12月18日（11・17）召使新太郎が江戸から戻る。シーボルトの出発に関する一通の書簡を受け取る。

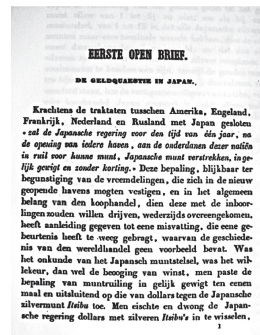
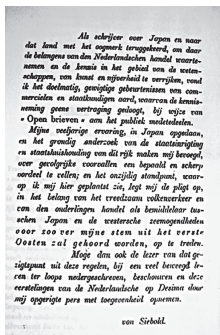
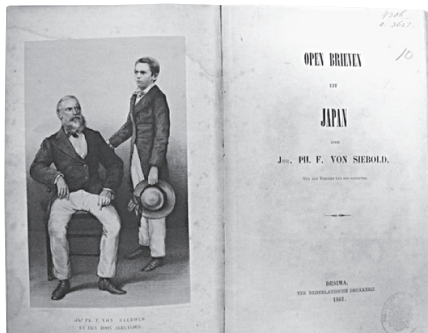
- 12月19日 (11・18) 12月16日の書簡について、外国掛老中宛に返書を書く(注:前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編208-209頁参照)。
- 12月20日 (11・19) 神奈川奉行(松平石見守康直)を訪問して、門人三瀬周三について自分の論文製作に協力させたことを率直に話す。
- 12月21日 (11・20) クネンボ、ブドウについての記述。
- 12月23日 (11・22) 神奈川奉行(松平石見守康直)がシーボルトに、ひとつの住居を提示する。奉行宛に一通の書簡を書き、その中で自分に提供された住居が小さすぎ、状態も悪いという理由をはっきり述べる。
- 12月24日 (11・23) 横浜の市場で7フィートのサメを見る。
- *12月25日 (11・24) 長崎奉行支配組頭中台信太郎が長崎からシーボルト宛の書簡を送る。
- 12月26日 (11・25) 息子アレクサンダーがイギリス公使のオールコックに同行して江戸に向かう。サメについての簡単な記述。
- 12月27日 (11・26) ロッテルダム新聞からの抜粋記事(遣欧使節団について)「使節団は当地では、彼らの派遣目的〈締結した条約の進行を遅らせること〉によって、一時的に条約を無効にしたがっていると見ている。また、帰途の旅路の際、ハーグに一時滞在の予定とのことである」と簡単な記述。
- 12月28日 (11・27) ヘルマン・トロイザイン (Hermann Treusein) 氏に託して1箱の種子とヨシノユリを香港へ。そこから船便でマニラへ送る。アメリカ商人フランク・ハール博士 (Dr. Frank Haal) とトーマス・ワールシュ博士 (Dr. Thomas Walsh) の家で晚餐。
- 12月29日 (11・28) シカ、イノシシはよく市場に出回る。横浜界隈ではクマ、キジ、ウサギも見られ、テンジクネズミも飼われていると記す。動物学についての記述。
- 12月30日 (11・29) 息子アレクサンダー宛の手紙を書く。カモ、キンケイ、ギンケイなど手に入れる。
- 12月31日 (12・1) セント・ルイス号の甲板で朝食。トラノオ〔マツハダ〕についての記述。
- *月日不詳、オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に領収書を送る。
- *12月日付不詳、ヴィダール (A. Vidal) がドルドグヌ (Dordogne) からシーボルト

宛に書簡を送る。

○『日本からの公開状』（蘭文）を出島オランダ印刷所で出版。



〔図98〕「日本からの公開状」（出島版の原本か）見開き部分にシーボルト父子の石版画はない。その左上隅にシーボルトの自署〈著書より〉が見える。右側は、その拡大写真（長崎大学経済学部所蔵「武藤文庫」）



〔図99〕「日本からの公開状」（オランダで印刷か）見開き部分と「序文」と「第一公開状の一部分」（財団法人東洋文庫所蔵）

- 草稿『自然科学、医学に関する1861年報』（蘭文）を執筆。
- 草稿『民俗文化の歴史的発展と現在の国家体制の発生と発達、8版40頁の継続分、1861年江戸（赤羽根接遇所）にて』（独文）を執筆。
- 『オランダのライデン市にあるフォン・シーボルト商会の施設に輸入された1859年、1860年、1861年の日本植物の目録』8頁。ライデンのドラベ（J. C. Drabbe）社発行。
- 『1861年。ライデン市（オランダ）にあるフォン・シーボルト商会の施設で栽培された日本植物の目録と市価』7頁発行。
- ◇幕府、種痘所を西洋医学所（のち医学所）と改称、医学教育を始める。
- ◇アメリカ南北戦争（～65）。

1862年（文久2年） 66歳

- 1月1日（12・2）水戸藩主には将軍家の家臣の中に多くの同志がいること、政治的なことの記述。
同日、外国奉行宛に蒸気船セント・ルイス号について手紙を書く（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編209頁参照）。
- 1月2日（12・3）長崎奉行支配組頭支配依田克之丞〔宛の手紙を書く？〕。
- 1月3日（12・4）陶器についての簡単な記述。
- 1月4日（12・5）12月23日（11・22）付のシーボルトの手紙に対する神奈川奉行所の返書を奉行所組頭若菜三男三郎、松村忠四郎、星野金吾より受け取る。横浜は相当寒いなど気象的な記述。
- 1月5日（12・6）果物に関する簡単な記述。草稿『幕府による江戸への招聘について』（独文）執筆。
- 1月6日（12・7）オランダ総領事J. K. デ・ウイット宛の手紙を書く。
- 1月7日（12・8）富士山の観測記述。
- 1月8日（12・9）1月1日付の手紙の返書を外国奉行から受け取る。

〈横浜から長崎へ〉

- 1月10日（12・11）横浜にて、「横浜発長崎行き荷物リスト」を作成。横浜港に停泊のアメリカ気船セント・ルイス号に、江戸で収集のコレクションを荷物にして

まとめ積み込む。外国掛老中宛に門人三瀬周三の拘留について歎訴の手紙を書く（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編210-211頁参照）。

- 1月11日（12・12）オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡と領収書を送る。伊藤圭介宛に絵像を贈る手紙を書く（注：前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編212頁参照）。
- 1月12日（12・13）横浜カトリック教会献堂式についての記述（正式名称 EGLISE DOSACRE-COEVR [聖心聖堂] 横浜天主堂跡：現在の横浜市中区山下町80番地）。汽船セント・ルイス号に、息子アレクサンダーに伴われて午後4時乗船し、夕食会に出席。参加者プロシア参事官リンダウ博士、オランダ領事ファン・ポルスブルック、ジラル（Girard）神父、アメリカ公使館書記官ポルトマン、船の所有者ワーケン（Waken）。シーボルトの荷物は箱に詰められ、神奈川奉行の命令で税金はかからず、検閲なしで船内に運ばれる。
- 1月13日（12・14）雨天のため沖に停泊したままと記す。
- 1月14日（12・15）8時ころ、錨が上げられる。富士山が雪で覆われていると記述。
- 1月15日（12・16）もの凄い高波。船酔い。船は異常なほど揺れる。天候は晴れと記す。
- 1月16日（12・17）朝、大王崎と潮岬までの海岸を見る。風強く波も強いと記す。
- 1月17日（12・18）オランダ総領事 J.K.デ・ウイットと播磨灘の淡路島付近で会い、コープマン（Koopman）艦長の船で、さほどうれしくもない会見をする。
- 1月18日（12・19）夜明けとともに、水先案内人なしで前進。兎島付近で停泊。漁村大島に着いて水先案内人を得る。民衆から心のこもった歓迎を受ける。大島の周辺で植物調査。11時半に錨が上げられ、夜、航行。
- 1月19日（12・20）左側に沖之島、右側に向島。北西方向への向かい風。2時ごろ、前島と因島、北東と北南の間。
- 1月20日（12・21）6時姫島。九州、周防、長門の高い山々が雪におおわれていると記す。12時ファン・デル・カペレン海峡へ。
- 1月21日（12・22）朝、五島と平戸の間。高波。前後の揺れ。同日遣欧使節団竹内下野守保徳総勢38名、オーディン号に搭乗し江戸を出発。
- 1月23日（12・24）長崎到着。長崎奉行（高橋美作守和貫）宛に手紙で、江戸からの荷物の輸入税免除を願い出る。同日遣欧使節団、横浜を出発。

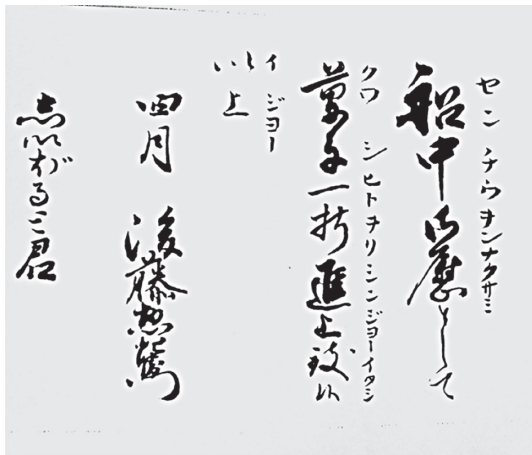
- 1月24日 (12・25) 長崎奉行 (高橋美作守和貫) から輸入税免除の返書を受け取る。
- ◇ 1月28日 (12・29) 遣欧使節団, 長崎到着。同日長崎にて, 横浜のオランダ総領事 J.K.デ・ウィット宛の手紙を書く。また外国奉行宛にロシア問題に関する手紙を書く。
- 1月29日 (12・30) 江戸の外国奉行宛の手紙を書く (対馬事件その他について, ロシアのリハチョフに書き送った手紙の返書の要約) (注: 前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編 蘭語文書・訳文271-273頁参照)。
- ◇ 1月30日 (1・1) 遣欧使節団, 長崎を出港。西欧の途に就く。
- * 2月6日 (1・8) 前長崎海軍伝習所教官カッテンディーケ (のちオランダ海軍大臣) がオランダのハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 2月8日 (1・10) ヘルマン・トロイザインが香港からシーボルト宛に書簡を送る。
- 2月9日 (1・11) 長崎奉行支配組頭中台信太郎と永持享次郎が連名で, シーボルト宛に書簡を送る。
- 2月10日 (1・12) 長崎奉行 (高橋美作守) 宛にロシア問題に関する手紙を書く。
- 2月12日 (1・14) イギリス商人・デント商会代表者 E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- ◇ 2月13日 (1・15) 老中安藤対馬守信正が坂下門外で襲われ傷つく。
- * 2月14日 (1・16) 元出島オランダ商館筆者兼荷倉役・一等官補バessler (G. A. C. Bassler) がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。
- 2月17日 (1・19) 外国掛老中宛にロシア問題に関する好意的な声明の手紙を書く。
- 2月18日 (1・20) 外国奉行 (新見伊勢守, 村垣淡路守, 津田近江守, 竹本隼人正, 大久保越中守, 一色山城守, 岡部駿河守) の連名でシーボルト宛に返書を送る (注: 前掲書『シーボルト先生其生涯及功業』乙編217頁参照)。
- 2月19日 (1・21) 外国奉行宛の手紙 (1月10付) の返書を受け取る。
- * 2月27日 (1・29) パリの植物学者ドカイスヌ (J. Dcaisne) がシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月9日 (2・9) ロシア使節関係者のエミリー・フィン (Emily Fynn) がベドブルグ近郊のシャゴウ・ドゥ・アルフト (Chageau de Harft pres de Bedburg) からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月14日 (2・14) ヘルマン・トロイザインが香港からシーボルト宛に書簡を送る。

- 3月18日（2・18）イギリス商人・デント商会代表者 E.クラークが横浜からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 3月26日（2・26）長崎奉行（高橋美作守和貫）がシーボルト宛に書簡を送る。
- * 4月1日（3・3）長崎奉行（高橋美作守和貫）がシーボルト宛に書簡を送る。
- * 4月3日（3・5）園芸家ルイーゼ・ストリイボッシュがボッシュからシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月4日（3・6）長崎奉行（高橋美作守和貫）の書簡で、オランダからのジギタリス、ツバキ、ヒヤシンス、亜麻仁、穀物の種子を貰いたいとの申出る。
- 4月7日（3・9）草稿『長崎近郊の鳴滝にある私の別荘について』（蘭文）を鳴滝の居宅で執筆。
- * 4月9日（3・11）フランスの植物学者シモン（G. Eug Simon）がサメディからシーボルト宛に書簡を送る。同日、オランダ総領事 J.K.デ・ウイトが出島からシーボルトに宛て書簡とオランダ領東インド総督（ファン・デル・ベール男爵）決定送付の添状を送る。中台信太郎を介して、奉行から種子の礼状を受け取る。
- 4月10日（3・12）フランスの植物学者 G.シモンが鳴滝を訪問。この頃、鳴滝の植物園はすでに1,200種近くの植物が移植・栽培される。外国掛老中宛に手紙を書き、ヨーロッパ出立を知らせ旅費の援助を請う（注：前掲書『シーボルト先生生涯及功業』乙編217-218頁参照）。
- * 同日、フランスの植物学者 G.シモンが長崎からシーボルト宛に書簡を送る。
- △ 同日、二宮敬作没する（享年58歳）。
- 4月15日（3・17）オランダ副領事代理 J.P.メットマンが出島からシーボルト宛に「紙に関する価格表」を送る。
- 4月17日（3・19）長崎にて、駐日オランダ総領事 J.K.デ・ウイト宛の手紙を書く。
- * 同日、ドミトリー・アルテニーエフ（Dmitry Arteniëff）が長崎からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 4月18日（3・20）長崎にて、上海の金銭支払証明書およびメモなど書く。ドミトリー・アルテニーエフが長崎からシーボルト宛に書簡を送る。
- 4月19日（3・21）鳴滝から4月9日付オランダ総領事 J.K.デ・ウイトからの書簡の返書を書く。

- 4月24日（3・26）長崎奉行（高橋美作守和貫）との別離の正式会見。奉行所から幕府要人を介して、鉱石460種のコレクションが贈られるとの知らせ。
- 4月29日（4・1）幕府要人を介して、鉱石のコレクションが贈られてきた、と奉行所からの手紙を受け取る。
- * 4月30日（4・2）オランダ領東インド政庁のメイ？（May）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 月日不詳、門人三瀬周三がシーボルト宛に書簡（4通）を送る。
- 春、ロシアの植物学者ヨハン・マクシモヴィッチ博士（Dr. Johann Maximowic）と召使（植物採集助手）須川長之助が来訪。
- 小冊子『日本に持参せる書籍目録』（仏文）を出島オランダ印刷所で発行。

〈長崎から帰国の途へ〉

- 5月1日（4・3）町年寄後藤惣左衛門より饞別品「菓子一折」贈られる。



【図100】後藤惣左衛門よりの饞別品「菓子折」の目録
（フォン・ブランデンシュタイン家所蔵）

- * 同日、オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡と領収書を送る。
- * 5月5日（4・7）E.J.プリル書店がライデンからシーボルト宛に請求書を送る。

- 5月6日（4・8）オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィン宛の手紙を書く。長崎奉行高橋美作守から和文の書簡を受け取る。
- 5月7日（4・9）長崎奉行高橋美作守和貫がシーボルト宛に書簡を送る。また、オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島から書簡と領収書を送る。夜8時、セント・ルイス号に乗船。長崎を離れる。10時、海上。息子アレクサンダーはイギリス公使館通訳として残る。
- *5月10日（4・12）オランダ副領事ファン・ポルスブルックが神奈川からシーボルト宛に書簡を送る。
- 5月12日（4・14）上海。
- 5月15日（4・17）夜、レイエモン号に乗船。香港へ。香港滞在。コマーシャル・ホテル（Commercial Hotel）に宿泊。
- *同日、上海駐在オランダ領事 T.クルースが上海からシーボルト宛に書簡を送る。
- *5月17日（4・19）上海駐在オランダ領事 T.クルースが上海からシーボルト宛に書簡を送る。
- 5月18日（4・20）福州坡を航行。
- 5月17日（4・19）上海駐在オランダ領事 T.クルースが上海からシーボルト宛に書簡を送る。
- 5月21日（4・23）コロンビア号に乗船。シンガポールへ向う。シンガポール滞在。ホテル・ドゥ・ヨーロッパ（Hotel d'Europe）に宿泊。コマーシャル・ホテルが香港からシーボルト宛に請求書を送る。シンガポールにて、オランダ領東インド総督（ファン・デル・ベール Van der Beele 男爵）宛の手紙を書く。
- *5月26日（4・28）ドイツ商人フリードリッヒ・アウグスト・リュードルフ（Friedrich August Lühdorf）が香港からシーボルト宛に「フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトに対する覚書」と称する書簡を送る。
- *6月2日（5・5）上海駐在オランダ領事 T.クルースが上海からシーボルト宛に書簡を送る。
- *6月3日（5・6）Fr.フライシャー書店がライプツィヒからシーボルト宛に請求書を送る。
- *6月7日（5・10）Fr.フライシャー書店がライプツィヒからシーボルト宛に書簡を送る。ヴァンロー？（H. J. Vanlo）がシーボルト宛に書簡を送る。

- 6月13日（5・16）シンガポールのホテル・ドゥ・ヨーロッパからシーボルト宛に請求書を送る。
- 6月日付不詳，シンガポール発バタヴィア行きの乗船券を受け取る。
- 6月17日（5・20）バタヴィアに到着。ホテル・ブールヴ（Hotel Bellevue）に宿泊。バタヴィア滞在中に1825年と1828年に日本から送ったスギの数株をバイテンゾルフ植物園で再び見る機会に接する。
- * 6月19日（5・22）オランダ通商会社駐日筆頭代理人A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- * 6月20日（5・23）オランダ通商会社がバタヴィアからシーボルト宛に領収書を送る。
- * 7月21日（6・25）オランダ領東インド総督（ファン・デル・ベール男爵）がシーボルト宛に招待状・短信を送る。
- ◇ 8月9日（7・14）遣欧使節団一行（38名）ロシアの首都サンクトペテルブルグに到着。



〔図101〕「遣欧使節団一行（38名）」（1862年8月撮影：〈撮影者〉ロシア歩兵大尉シバコフスキー；原写真エルミタージュ美術館所蔵）ロシアの首都ペテルブルグのネヴァ河畔にある「皇帝の冬宮」（現在はエルミタージュ美術館）の並びにある迎賓館「大理石宮殿」で撮影されたものであろうか？この宮殿が使節団一行の宿舎となる。・写真前列：左から竹内下野守保徳（正使）・松平石見守康直（副使）・京極能登守高朗（御目付）・柴田貞太郎剛中（外国奉行支配組頭）・森銚太郎（外国奉行支配定役）

- * 同日、ロッテルダムの船主・貿易商 A.ホボーケンがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 8月11日（7・16）オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 8月12日（7・17）オランダ領東インド総督（ファン・デル・ベール男爵）宛に、江戸での全体的な活動についての覚書を送る（注：前掲書所収、マクリーン論文の訳文『シーボルトと日本の開国』1843-1866年93頁参照）。
- 8月23日（7・28）バタヴィアにて、旅費精算書を受け取る。
- 8月24日（7・29）シーボルト収集のコレクション、長崎出港のアンナ・マリア・ヴィルヘルマ（Anna Maria Willhelma）号に積み替えられ、アムステルダムに向けて送り出される。
- 9月1日（8・8）バタヴィアにて、オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィン宛の手紙を書く。
- * 9月26日（閏8・3）ロシア海軍極東遠征隊司令官イワン・フェドロヴィチ・リハチョフがサンクトペテルブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月7日（閏8・14）オランダ領東インド政庁のファン・ゲーヴォルデン（van Goevorden）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月10日（閏8・17）ブラー？（J.Ch. Bular）がシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月21日（閏8・28）元出島オランダ商館筆者兼荷倉役・一等官補 G. A. C.バッスラーがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月23日（9・1）オランダ領東インド総督（ファン・デル・ベール男爵）がバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る。
- * 10月29日（9・7）元出島オランダ商館筆者兼荷倉役・一等官補 G. A. C.バッスラーがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。オランダ領東インド総督（ファン・デル・ベール男爵）がバイテンゾルフからシーボルト宛に通達（公文書）する。
- ◇ 11月1日（9・10）出島オランダ印刷所活版印刷技師インデルマウルがシーボルト宛に領収書（月給とバタヴィアまでの乗船料など）を送る。ボンペ・ファン・メーデルフォールト、オランダ商船ヤコブ・エン・アンナ（Jacob en Anna）号で帰国。
- * 11月2日（9・11）幕府派遣のオランダ留学生、榎本武揚ら長崎を出発。
- 11月3日（9・12）バイテンゾルフにて、第2次海軍派遣隊員海軍一等尉官ファ

ン・トロイエン (B.D. van Troijen) 宛の手紙を書く。

- *11月4日 (9・13) 元出島オランダ商館筆者兼荷倉役・一等官補 G. A. C. バッスラーがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。
- 11月14日 (9・23) バタヴィアを出発。
- 11月28日 (10・7) オランダ領東インド陸軍からオランダ陸軍の感謝状を受け取る。
- *12月14日 (10・23) 元出島オランダ商館筆者兼荷倉役・一等官補 G. A. C. バッスラーがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。
- 12月中旬, カイロ滞在。ホテル・ドゥ・オリエント (Hotel d'Orient) に宿泊。帰国の途につく。
- *12月17日 (10・26) ホテル・ドゥ・オリエントがカイロからシーボルト宛に請求書を送る。
- *12月30日 (11・10) オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J. ボードウィンが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
- 月日不詳, 「1862年10月29日付オランダ領東インド総督の決定について」メモする。
- △月日不詳, 元ライデンの国立植物標本館館長 C.L. ブルメ没する (享年66歳)。
- 『日本に持参せる書籍目録』出島オランダ印刷所, 8つ折り本刊行。
- 『1862年, ライデン市 (オランダ) にあるフォン・シーボルト商会の施設で栽培された日本の新しい植物の目録と市価』10頁発行。
- 『1862年, ライデン市 (オランダ) にあるフォン・シーボルト商会の施設に導入され, 栽培された日本の新しい植物の追加目録と市価』4頁発行。
- ◇孝明天皇妹和宮が將軍家茂に降嫁。
- ◇坂下門外の変。◇寺田屋の変。◇生麦事件。